僕とバカとFクラス

惰眠こそ至上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕とバカとＦクラス

【Ｎコード】
Ｎ８０９０Ｗ

【作者名】
惰眠こそ至上

【あらすじ】
Ｆクラスにはいることになった主人公は地味で普通な一般人？
そんな主人公はＦクラスに溶け込めるのか？
まあ、そんなこんなで明久達とバカで楽しい生活が始まる。

ヒロインは秀吉、優子、小山、高橋を考えています。霧島、姫路、美波以外であれば、要望があれば
そのようにしたいです。

プロローグ（前書き）

どうも、初の二時創作です。並列投稿なので、週1ペースになりそうですが出来れば読んで行ってください。主人公をこれからどうするかは未定です。地味に活躍はして行きます。（もしかしたら派手になるかも？）

作者はムッツリーニ大好きです。出番を増やせるかわかりませんが・・・・

プロローグ

こんにちは、僕の名前は吉田守(よしだまもる)今日から文月学園の２年生。

それはいいんだけど・・・・・・・僕が今立っているのはＦクラスの前、憂鬱だ・・・・・ｏｒｚ

そもそも、ここ、文月学園は最新鋭の試験校のため、かなり厳しい制度がある。

それは、『振り分け試験』と呼ばれる。１年の最後に行われる試験で、その結果により、クラスが決まる。そう、即ち完全な実力主義ということだ。成績の良いものにはそれ相応の設備を与え、その逆もまたしかり。そして、Ａクラスが最高でＦクラスが最低とされている。

僕？僕はそんなによくもなければ悪くもない、普通だ。Ｃクラス相当だと思う。

ではなぜＦクラスの前にいるのか、それは・・・・・・・・・

何とも情けないが、試験当日に風邪をひいてしまったからだ。

おかげでテストは０点、Ｆクラスへと決まった。

「ふう・・・・・鬱だ・・・・死にたいｏｒｚ」

Ｆクラスはやっぱりバカしかいないだろうし、ちゃんとやっていけるかな？

不安だ・・・・・・けど、そろそろ入らないと遅刻しそうだしなぁ・・・・

その時廊下の向こうからかけてくる影を見つけた。

「わあぁぁぁぁぁ！！ちっ、遅刻する！！」

その男の子は僕と同じ、Ｆクラスの前で立ち止まった。そして僕を認識したのか

「あれ？君もＦクラス？僕は吉井明久よろしくね。」

「僕は吉田守です。よろしく。」

「それじゃあ早く入ろうよ、遅刻しちゃうよ？」

「そうですね、それじゃ行きましょう。」

そうだ、いまさらどうしようもないんだから、ここでできるだけ楽しもう。

そう決意して僕はＦクラスの扉に手をかけた。そして吉井くんと共に中に入る。

「すいません、遅くなりました。」

「すいませ～ん。ちょっと遅れちゃいました」

「さっさと座れ！！このうじ虫野郎！！」

何なんでしょう、入るなり今後友好的な関係を結べる可能性が薄そ

うな罵倒を浴びせられましたよ？
というよりも誰なんでしょうか、彼。先生ではなさそうですが・・・

「あれ？雄二、教壇なんかで何やってるの？」

どうやら吉井君の知り合いで、名前は雄二というらしいですね。下の名前で呼ぶなんて、仲のいい友達同士なんですね～。

「おう、明久か。なに、先生が遅れていてな、代わりに上がってみた。というより、お前の隣の奴は？」

「ああ、吉田君だよ、同じFクラスなんだ。」

「そうか、吉田、さっきはすまなかったな。あの罵倒は明久のためだけのものだったんだが・・・」

「雄二、僕に謝罪はないのかい？」

「さっきも言ったろ、明久。さっきのは親友としてお前のためだけの・・・・・・・・・罵倒だ。」

「違う！そもそも、親友に対してまず罵倒することはない！！」

「だから、明久。お前は俺にとって特別なんだ。お前を見てると・・・・・・・・・・・・無性にイライラする。」

「それは特別の意味が違う！！それを人は敵意と言うんだよ！」

「おお、明久！ちゃんと敵意の意味が分かるのか！？」

「雄二は僕がバカだとばっかり思ってるみたいだね？」

「そりゃ、そうだ。だってお前、バカだし。」

「ぬがあああああ！雄二だって変わらないじゃないかぁ！！このバカ雄二！！」

「なんだと！？今の発言は聞き捨てならねえな。俺がバカだって？」

「そうだよ！！」

「ふざけたことばっか言ってんじゃねえぞ！！このバカが！！！」

「そっちこそ！！」

「うぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ・・・・・・・・・・・・・・」

「うぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ・・・・・・・・・・・・・・」

訂正・・・・・ほんとにこの２人は友達なんでしょうか？完全に敵同士のような気がするんですが・・・・・・・

こうして、僕のあわただしく、楽しいＦクラス生活が始まった。

プロローグ（後書き）

ということで、「僕とバカとFクラス」でした。
まだまだ駄文ですが、付き合っていただければ幸いです。

感想、指摘などお待ちしていまーす。

多分、作者は泣くほど喜ぶんで。

第2話～僕と変人と自己紹介～（前書き）

どうも、惰眠貪ってる作者です。
休日ということで、昼夜に分けて投稿してみました。
多分最初の頃だけになりそうですが。
もう1作並列投稿してますが、こっちは書きやすいです。
やっぱり原作知ってるからかな？
それではどうぞ読んでいって下さい。

第2話～僕と変人と自己紹介～

ふう・・・・やっと二人のいがみ合いが終わりましたよ・・・・
まあ、まだ睨み合ってはいますが・・・・・

「はい、そこで立っている人たち。席について下さい。」

おっと、担任の先生が来たようですね、見た目は完全に冴えないおじさんですが・・・・

「失礼した、先生。ほら、行くぞ明久と・・・・誰だ？」

そういえば、あの怒涛の言い合いで自己紹介を忘れていました。

「僕の名前は・・『まあいい、どうせ後で自己紹介があるだろう。』・・・・そうですね・・・・」

いえ、別に悲しいとか遮られて残念とかソンナコトナイデスヨ？ホントデスヨ？

「あ！あの後ろの方空いてるよ。あそこにしようよ。」

そう言って席にむかう吉井くん。

というより、今気づきましたが、本当に設備がひどいですね！！

座布団にちゃぶ台という装備もさることながら、座布団の綿はほとんどなく、ちゃぶ台もボロボロです。

教室中に蜘蛛の巣があるし、窓もガラスが無い所が多々見られます。

まあ、Fクラスだし、仕方ない。そう割り切り、席に座ると先生が喋り始めました。

「え～皆さん、進級おめでとうございます。私はFクラスの担任の福原慎（ふくはらしん）です。よろしくおねがいします。」

とても地味な先生ですが、このFクラスの中で一番常識人っぽい。かなり、親近感を覚えました。

「それでは、皆さん自己紹介をしてもらいましょうか。窓際の方からお願いします。」

そういうと、皆さん自己紹介を始めました。さすがにFクラスといえど、そこまで変な人はいないみたいですね。よかったです。

「ふむ、次はわしの番か。」

わし？奇妙な言葉遣いですね。誰でしょうか？

そうおもい、声の方へ顔を向けると・・・・・・

「わしは木下秀吉（きのしたひでよし）　じゃ。演劇部に所属しておる。よろしくたのむぞい。」

絶世の美女といっても差し支えない子が。ただ、制服は男もの。

(男装が趣味なのか？やっぱりＦクラスだなあ)

「ちなみに言うておくと、わしは男じゃぞ？」

「「「「「な、なにいいいいいぃぃぃぃぃ！！」」」」」

Ｆクラス男子ほぼ全員による魂のシャウト。僕もその中の一人。

ただ、吉井くん達は反応がなかったから、知ってたのかな？

さて、まだショックは残ってるが次の人だ。

「俺は須川亮（すがわりょう）趣味とかはあまりないが、リア充を殺ｓ・・・・・じゃない、正しき道に導くのが使命だ。
そんな俺の思想に賛同するもの達よ！！俺が創るＦＦＦ団に入れ！！そして愛を手に入れ、狂ったリア充共に正義の鉄槌を！！」

「「「「「「「うおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」」」」」

今度は今度でＦクラス男子全ての魂のシャウト。

もういや・・・・・・帰りたい。

沈んでいる間に結構進んだようです。次のひとは・・・・・静かそうな小柄な男の子。

「土屋康太（つちやこうた）・・・・よろしく。」

うん、やはり静かなひとのようです。良かった。

「特技は盗さ・・・・・特に無い。趣味は盗ちょ・・・・・・・・特に無い。」

うん。あのポケットからはみ出してるレコーダーやカメラは違うよね？ただ、写真撮ったりするのが趣味なだけ！！
そう、そうに決まってる！！

さて、あまりのショックで他のひとの話をほとんど聞いてませんでした

「・・・です。育ちは外国で日本語は話すのは大丈夫だけど、読み書きはまだ苦手です。」

お？女子の声だ。っていうか初めてじゃないか？どんだけ男子ばかりなんだ・・・・・Ｆクラス・・・・・・

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

「あはは、冗談がうまいな～ねえ？吉井くん？」

（（（（（；゜Д゜）））））　（ガクガクブルブルガクガクブルブル）

吉井・・・くん？なぜそんなに震えているの？島田さん（名前いってた）の話が終わった頃から・・・・・・

まさか、さっきの話が本当なわけない・・・・よね？

もう気にし無いようにしよう。僕自身のためにも。

おっと、吉井君の番だ。ガクブル状態からは抜け出したみたい・・・・・・良かった・・・・・

「吉井明久です☆気軽に『ダーリン』って呼んでください☆」

うん。ちょっと面白くてとっつきやすい人って印象を受ける。なかなかいい自己紹介だ。

「「「「「「「ダアアァァァァリイイィィィィィィン！！！！！！！！！」」」」」」」

「失礼、忘れてください・・・・・・・」

若干青ざめながら座る吉井君。仕方がない、何せ野太い男の声で大合唱されたしな・・・・・・

それにしても、実際に言うなんて・・・・・・やっぱり、Ｆクラスだな・・・・・・・

さて、これで最後、吉井君の友達　（？）の番だ。彼は壇上にゆっくりとした足取りで上がっていき・・・・

ガラッ

その時、教室のドアが開いた。そして、そこにいたのは学園トップクラスの才女と言われる姫路瑞希さんだった。

（なぜ彼女がここに？）

おそらくみな思ったであろうことを一人の男子生徒が代弁した。

「な、何でここにいるんですか？」

「そ、その試験のとき熱を出してしまって・・・・・」

なんと！！僕と同じ理由とは、高嶺の花とはいえ親近感がわくなあ。

そんな僕をしり目に、みんながしゃべる、しゃべる。

「そうそう、俺も物理のとき熱　（の問題）がでたＦクラスに・・・」

「俺は弟が病気と聞いて気が気じゃなくて・・・・」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくて・・・・・・」

「「「「「「「判決、死刑！！！！！」」」」」」」

「まっまて！ジョークだって！ほんのジョーk・・・・ぎゃあああぁぁぁぁぁぁ！！」

あれ！？１箇所原作と違くない！？

【メタはダメだよ。それにこっちのほうがＦＦＦ団っぽいでしょ☆】

違うと言い切れない・・・・・・・・・はっ、っていうか今の声誰？

ま、いいや。気にしたら終わりそうな気がするし。

「ということで、ひ、姫路瑞希です。よろしくお願いします。」

うんうん、楽しくなりそうだ・・・・・・向こうのほうでさっきまで聞こえていた叫び声が消えたのは気にしないでおこう・・・・・・・

ということで、中断されていたが、彼の番だ。彼がここのクラス代表らしい。

僕？僕は終わってますよ？もちろんふっつ～の自己紹介でしたが、逆に変な目で見られましたよ・・・・・・・普通がそんなに悪いか！！

「みんな、おれがクラス代表の坂本雄二（さかもとゆうじ）だ。さて、まず皆に聞こう。」

そういって部屋の設備をゆっくりと眺めていく坂本君。それにつられるクラスメイト達・・・・・うまい。

少し時間をおいて、一言。

「不満はないか？」

「「「「「「「「おおありじゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」」」」」」」

爆発するFクラスメンバー

「だろう？俺だってこの状況は大いに不満だ。」

そうだそうだと、あちこちから声が上がっている。それが静まるまで待つ坂本君。

「だから俺は提案する・・・・・・・・・試召戦争を仕掛けるぞ！！！」

その途端、静まり返るクラスメイト達。そして口々にしゃべりだす。

「どうせ、俺たちなんかじゃ・・・」

「それに負けたら補習だし・・・・・」

「姫路さんさえいれば何もいらない・・・・・・」

最後のは違うような気がする。

「安心しろ、勝ち目のない戦などしない。理由を教えてやろう。」

そう言って坂本君はさっきの小柄な男子を呼んだ。

「オイ、ムッツリーニ。いつまでも姫路のスカートを覗いてないで来い。」

「ブンブンブンブン！！」

顔を地面に着けてまで覗き込むとは・・・・・・さらに、そこまで証拠が残っていてなお否定するとは・・・・・・

「こいつがあの有名な『ムッツリーニ』だ」

文月学園の美女・美少女の写真を取り扱っているといわれるムッツリ商会の主か！！

まさか・・・・こんな所にいようとは・・・・・・・・・・・・あれ？

すごく納得がいくんだけど？

「それに、木下秀吉。」

「わ、わしもか？」

「演劇部のホープ・・・・・」

「あいつの姉ってあの木下優子だろ？もしかしたら・・・・・・」

「姫路瑞希。」

「彼女はＡクラス並みの戦力だもんな！！」

「ふえっ？わ、私もですか？」

「それに俺も全力を尽くす。」

「坂本って昔『神童』って呼ばれてたらしいぜ。」

「マジか。じゃあＡクラス並みが２人もいるってことか。それなら・・・・・」

おお、みんなの士気が上がっていく・・・・・計算済みか？スゴイ人だな坂本君は。

「それに吉井明久だっている。」

シーーーーーーーーーーン

「ちょっと！！　雄二何でそこで僕？せっかく士気が上がってたのに・・・・・・・って何で僕をにらむのさ！！」

「誰だ？吉井って？」

「知らん、でも誰も知らんってことはカスなんじゃ？」

「ふっ、知らないなら教えてやろう・・・・・こいつは・・・・・・・吉井明久は・・・・・・・・

『観察処分者』だ！！」

第2話～僕と変人と自己紹介～（後書き）

さて、どうでしたでしょうか。

主人公のキャラがあまり定まってません。

ダメな作者ですが、今後もおつきあいしていただければ幸いです。

感想・アドバイス・評価などお待ちしています。

作者に生きる糧を・・・・・・

ではまた次回。

第3話～僕と悪魔と召喚戦争（前書き）

どうも、第3話です。やっぱりこっちのほうが書きやすいですね・・・・・

最近体育祭が近づいてるので学校が忙しいです。
ある意味息抜きになってますね～
では本編です。

第3話～僕と悪魔と召喚戦争

「『観察処分者』・・・・・ですって？・・・・・・・・・・そ、それって・・・・・

バカの代名詞だったような気がするんですが・・・・」

「ち、違うヨ？これはちょっとおちゃめな高校生に付けられるだけで・・・・・「そうだ。バカの代名詞だ。」肯定するな！！バカ雄二ー！・！」

そういえば、風の噂でこの学年に一人『観察処分者』がいると聞い

たことがあるが・・・・・まさか吉井君とは・・・

「『観察処分者』って何なんですか？」

おっと、姫路さんは知らないようだ。まあ、仕方ない。姫路さんは聞くことのない単語だからな。そんな姫路さんに坂本君が説明する。

「ああ、姫路は知らなくても無理ないな。『観察処分者』ってのは、学校側から監視が必要だといわれる程素行も学業も悪い奴に与えられる、まさに選ばれた者にしかもらえない称号だ。」

「へ～、すごいんですね！」

「姫路さん！？今の説明ですごいと思える要素はないと思うよ！？」

思わず口を出してしまった。というより姫路さん、あれは天然なのか……？

おっと、坂本君の説明はまだ続いてるようだ。

「が、利点もある。『観察処分者』の召喚獣は教師と同じで物に触ることができる。それで教師の手伝いをするのが仕事だな。」

「やっぱり凄いんですね！吉井君！」

「い、いや、そんなに良い物じゃないよ。確かに物には触れるけど、その分疲労や痛みが少しフィードバックされるんだ。」

なるほど、確かにそうでもしないと罰にならないからな。

「待てよ？てことは戦争中にダーリンは『その呼び方はやめて！！！』・・・わかった。吉井は簡単に召喚できないんじゃ？」

疑問を口にするＡ（ゴメン、名前覚えてねえや。）

それに対し悠々と受け答えする坂本君。

「気にするな。所詮いてもいなくても変わらんような『雑魚』だ。」

「雄二、そこは僕をフォローするところだよね？っていうか！そんなに雑魚を強調するな！！」

「フン、雑魚に変わりないだろうが。明久。」

「いったな、雄二。今そんな考えが間違っていることを教えてやる・・・・・」

「ほう？やれるもんならやってみやがれ。」

「言ったな！！このバカ雄二！！！」

そういってまたもドッグファイトに突入する2人。あの二人はどういう関係なんだろう・・・・うまく言えない・・・・・・誰かわかる人がいたら教えてください。

「明久、雄二落ち着くのじゃ、今は召喚戦争の話じゃろう？」

場を収める木下さ・・・くん。ＧＪ！！

「ふん、今日は引いてやろう、良かったな明久。」

「そっちこそ、無様な姿をさらさなくてよかったね、雄二」

「「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬ」」

二人はほんとに何なんでしょうね？

「とまあ、今のはジョークだ明久、はっはっは。」

「なんだ、そうだったの？早く言ってよ雄二。本気で殺意を持つとこだったよ」

「本気で殺意を持つ相手を友人とは言わんと思うのじゃが・・・・・」

奇遇ですね。僕もそう思いますよ木下・・くん

「というわけで、だ。皆、まずはＤクラスを攻めようと思う。」

「なんでＤクラス？僕らの目的はＡクラスでしょ？」

「いいか？明久、どう頑張っても、うちの戦力じゃＡクラスには勝てない。」

自信満々な坂本君にしては弱気な発言ですね。

「が、勝てないわけじゃない。」

「雄二よそれは矛盾しておるぞ。」

「違う。勝てないのは真っ向から勝負すればって話だ。勝てる土俵に持ち込む。Dクラス戦はそのための布石だ。」

「というわけで明久、戦争開始の『死者』としてDクラスに宣戦布告して来い。」

「なんか、使者の文字が違ってるような・・・・」

「気のせいだろう。」

「そっか、でもこういう使者って大概ひどい目に会うんじゃ・・・・」

「大丈夫だ、明久。俺が保証してやる。おれが危険なところにわざわざ友を送ると思うか？」

「・・・・うん、そうだよね！！行ってくる！！」

そういって吉井君は飛び出していきました・・・・・が、僕は見ました。

その吉井君を見ていた坂本君の口が一瞬、ほんの一瞬だけ邪悪に歪むのを・・・・・・

「騙されたぁっ！！！」

吉井君が帰ってきました。全身ボロボロで・・・・・

「雄二！全然大丈夫じゃなかったよ？あっちの人たち宣戦布告した途端つかみかかってきたよ！！？」

「ふむ、やはりそう来たか。」

「くきいいいいいい！！殺す！殺しきる！！」

「落ち着け『ぐぼあっ！！』・・・まったく、後で作戦会議だ屋上に来い。」

殴り掛かってきた吉井君に躊躇なく鳩尾に拳を叩き込んだ坂本君。しかも悪びれもしてない。

悪魔だ・・・・悪魔がいる。

「っと、そうだ。お前も来い。吉田。」

「ええ？ぼ、僕ですか？何で…？」

「イ・イ・ナ？」

が、僕はＮＯと言える日本人。

「はい！！！」

うむ、我ながらいい返事だ・・・・・・・

こうして、僕らは初日から召喚戦争をすることになった。

っていうか何で僕は目をつけられたんだろう・・・・・？

第3話～僕と悪魔と召喚戦争（後書き）

どうでしたでしょうか。細部はすこ～しだけ変えてます。
ヒロインが・・・ヒロインが決まらないッ！！
まだ誰にしようか悩んでます。要望があれば作者のできる範囲内でかなえようとは思いますので、ある方はぜひ。
あと、３，４話中にはヒロインを決定、複数か一人かも決めようと思います。

今回も付き合っていただきありがとうございました。

感想・評価・アドバイスなど作者は心よりお待ちしてます。

ではまた次回で。

第４話～僕と皆とミーティング～（前書き）

お久しぶりです。
作者が降臨しました。嘘です。偉そうなこと言って申し訳ありません。
今回で主人公の能力（？）を出そうと思ったんですが二話に分けて投稿することにしました。後半では判明する予定です。
では本編を・・・・どうぞ～

第４話～僕と皆とミーティング～

さて、ミーティングだ。坂本君に呼ばれたし行かないと。そういえば、吉井君は？さっき殴られてたけど・・・・・

「ほ～ら、吉井あんたも行くの。」

よかった、島田さんが連れて行くようだ。

「へいへい。」

「返事は一回！」

「へ～い。」

「まったく。一度Ｄａｓ　Ｂｒｅｃｈｅｎ・・・・・ええと、日本語だと・・・・」

「・・・・・・調教。」

「「うわっ！！（キャッ！！）」」

「・・・・ってムッツリーニか。ビックリさせないでよ。っていうか調教なんてドイツ語よく知ってるね。」

「・・・・・一般教養。」

土屋君・・・いや、ムッツリーニの一般教養とはどんなものなんだろう？

普通でないことは確かだな、うん。

「そういうことで調教の必要性がありそうね。」

「どういうことか全くわからないよ島田さん！！それに調教じゃなくて、別の言い方があるでしょ？」

「別の？う～ん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折檻？」

「余計酷くなったよ！！」

このやり取りを見て僕は島田さんの自己紹介があながち間違っていないことを確信した。

「っていうか、ムッツリーニ。相変わらず性の知識はずば抜けてるね。」

「・・・・・・！（ブンブンブンブン）」

「いやいや、いまさら無理があると思うよ？」

「・・・・・・！！（ブンブンブンブン）」

「ほら、さっき姫路さんのスカート覗いてた跡、まだついてるよ？」

「・・・・・・・・！！！（ブンブンブンブン）」

「そこまで証拠がそろってても否定できるのは凄いと思う。」

「・・・・・・・・・・・・！！！！（ブンブンブンブン）」

「・・・・・何色だった？」

「水色。」

「「即答かよ！！！！」」

はっ、しまった。ついつい突っ込んでしまった。それにしても・・・・・さすがはムッツリーニ、その異名は伊達じゃないぜ。

「そろそろ行きましょ？お昼も食べれなくなるわよ？」

そうだった。呼び出されてるし、早く行かないと。

晴れ渡った空に太陽がまぶしい。屋上に来るともう主要人物は揃っていた。

坂本君が口火を切る。

「明久、宣戦布告はちゃんとしたよな？」

「うん、今日の午後に開戦って言っといた。」

「それじゃ、ウチらはまず昼ごはんってことよね？」

「ああ、そういうことだ。」

そして、各々弁当やパンを取り出していく。・・・・吉井君以外。

「明久、今日ぐらいまともな物を食べろよ。」

「そう思うんだったら少しくらい恵んでくれてもいいと思うんだけど・・・・」

「えっ？吉井君はお昼を食べない人なんですか？」

姫路さんは驚いたように吉井君を見ている。僕も同感だ。成長期のこの体に昼抜きはさすがにキツイ。

「いや、一応食べてるよ。」

言いつつも目をそらす吉井君。

「あれは食べてると言えるのか？」

坂本君が横やりを入れる。

「どういうことさ、雄二。」

「いや、お前の主食って・・・・・・・・・水と塩だろう？」

哀れむような・・・・・いや、哀れんだ言い方だ。

「失礼な！！きちんと砂糖と油も食べているさ！！！」

「吉井君・・・・それは食べると言わないんじゃあ・・・・・」

「舐める、が正解じゃろうな。」

皆が哀れんだ視線を吉井君に向けている。

「ま、飯代まで遊びに使うお前が悪いな。」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

ということは一人暮らしか・・・・・・・・大丈夫かな。部屋で死んでそうだけど。

姫路さんが口を開いた。

「あ、あの・・・・・よかったらお弁当作ってきましょうか？」

「ゑ！！？」

「ほ、本当にいいの？」

「は、はい！明日の昼でよければ・・・・」

「やったー！！ありがとう姫路さん。塩と砂糖以外のものなんて久しぶりだよ！！」

「良かったな、明久。手作り弁当だなんて。」

「うん！！」

「・・・・ふーん、瑞希って優しいのね。吉井だけに作った来るなんて。」

何やら棘が含まれてるな・・・・・・ああ、なるほど、そういうことか。大変だな島田さんも。

「あ、いえ！良かったら皆さんにも・・・・・・」

「俺たちにも？いいのか？」

「それは楽しみじゃのう。」

「・・・・・・・・（コクコク）」

「・・・・お手並み拝見ね・・・・・・」

「えっと・・・・僕も含まれるの・・かな？」

「はい、吉田君もぜひ。」

「それじゃあ。ありがとうございます。」

「やっぱり、姫路さんは優しいね。」

「そ、そんな・・・」

「今だから言うけど僕初めて見たときから君のこと好き・・『おい明久。今振られたら弁当の話はなくなるぞ。』にしたいと思ってました！！」

・・・・・まさかのカミングアウト。吉井君？そんな『僕うまく回避しました。』的なキメ顔してるところ悪いんですが・・・・

「明久よ、それでは欲望をカミングアウトしたただの変態じゃぞ？」

・・・・・・クスン・・・・・・・べ、別にセリフとられて悲しいとかそんなんじゃないんだからねっ！！

失礼しました。

「明久、お前は時々俺の想像を超える男になるな・・・・」

「だって、お弁当が・・・・・・」

「まあいい、試召戦争に戻ろう。」

そうだった。そのためのミーティングだった。

「雄二よ、どうしてDクラスなんじゃ？普通は一つ上のEクラスじゃと思うんじゃが。」

「ああ、Eクラスなんて戦うまでもないからな。ま、色々理由はあるが。その中の一つ、俺もわかってないことがある。未知数なものがな。」

「未知数な物？何じゃ？」

「それはな・・・・・・・吉田、お前だ。」

「えっ？ぼ、僕ですか？」

「ああ、お前だよ。」

そういって坂本君はこっちに歩いてきてそのまま・・・・拳をふるった。

「「「雄二！？（坂本！？／坂本君！？）」」」

が、僕はそれを予測していたため難なく避けた。

「ほう・・・やはり避けるか・・・かなり本気で殴りに行ったんだがな。」

「やはりってどういうことですか？坂本君。」

「雄二でいい。・・・・お前、何か隠してるだろ。」

ギクッ

「そ、そ～ンなことアリマセンヨ、ホントデスヨ？」

「吉田君が何を隠してるの？」

「ん？明久か、わからん。」

「「「わかんないの（ですか）？」」」

「だから白状してもらうのさ・・・・・なあ？吉田？」

お父さん、お母さん。守はただいま絶賛ピンチ中です。助けてください。

第４話～僕と皆とミーティング～（後書き）

どうでしたでしょうか。
さて、ヒロインの件ですが秀吉は入れようと思っています。

あと、数話は余裕があるので希望がある方は是非。
感想・アドバイス・評価もお待ちしてます。

第5話～僕と皆とミーティング～後編（前書き）

お久しぶりです。作者が帰ってきたよーーー！・・・・・すいません、ふざけました。
連続投稿です。キツイです。連続で投稿してる人って本当に何者なんでしょうかね？

ともかく、本編をどうぞ

第5話～僕と皆とミーティング～後編

さて、今僕の目の前にはさっさと吐けと言わんばかりの坂m・・・・・いや、雄二。他の人も僕が何を隠しているのかと興味津々のようだ。

「「「「「「さ、吐け（吐きなさい／吐いて下さい／吐くのじゃ）。」」」」」」

「ぼ、僕はそんな脅しには屈しませんからね！！」

「そろそろ口調も元に戻したらどうだ、守。」

「・・・・！！ばれてたか・・・・」

「あたりまえだ、俺を誰だと思ってやがる。」

はあ、仕方ないかな。まあ、いつかはばれるもんだし。というより雄二がそれを調べるために手段を選ばなさそうだからな。

「はあ、ＯＫＯＫ白状するよ。説明するのは難しいがな。」

「いいから話せ。」

「・・・・坂本雄二。身長１８３ｃｍ体重７２キロ、スリーサイズは上から８２・６８・８４。５０メートルのタイムはおそらく６．５秒、垂直跳びは７５センチってとこか・・・・・筋肉の付き方からしてやっているのはボクシング、スタイルはそこそこの打撃力と相手を冷静に見きわめる観察眼をもとに、正確に相手の急所に打撃を叩き込むようなタイプだろう。それに、ボクシングだけじゃなく

ケンカで培ったものも応用しているはずだ。素晴らしい体だ、よく鍛えこまれている。」

「まさか、ここまでとはな・・・・・・・すべて正解だ。スリーサイズは測ったことないからわからんが記録やボクシングに関してはパーフェクトだ。」

「すごい！！ねえねえ、僕も視てみてよ！あ、僕は明久でいいよ。」

「わかった、明久。・・・・・・・吉井明久。身長１７２ｃｍ体重５７キロ、上から７３・５８・７６。５０メートルは６．４秒、垂直跳び７３センチだな・・・スポーツや武術をやってないにしてはかなり引き締まってるな・・・・まあ、食生活のせいもあると思うが。というより、食生活さえ改善すれば素晴らしい選手に・・・・・・・・・・・・・・フフフフフ・・・・・フフフフフフ・・・・・」

「お、お～い、守？」

「ハッ！？す、すまん。まあ、そんなとこだ。他には？」

「・・・・・女子のデータも、わかる？」

「ムッツリーニか・・・もちろん分かるぞ？それがどうしたんだ？」

「視れば、誰でも？」

「誰でも。」

「・・・パッドの場合。」

「そんなもの見抜けるに決まっているだろう。」

「・・・・・・・トップとアンダーの差。」

「右に同じ。」

「・・・・・・・・無念っ！！！」

そういうとムッツリーニは地面を叩いて悔しがっていた。・・・・・・どうしたんだ？

「どうしたの？ムッツリーニ。」

「ああ、明久か丁度いい。ムッツリーニはどうしたんだ？」

「・・・・・・・・俺が測れるのはサイズだけ・・・・・・細かいサイズは無理。・・・・・こんなところに俺より上の存在がいたなんて・・・・・」

「な、なんだって！！守はムッツリーニより測定力があるのか！！」

「・・・・・・悔しい。」

「そうそう、守。お前、俺のパンチを躱したのはどうやったんだ？」

「ん？あれか？あれもこれの応用だ。要は観察したのさお前の筋肉の動きや目線、呼吸やその他もろもろで予想じゃない、予測をするんだ。」

「やはり、俺の予想通り化け物だったな、お前。」

「な！？その発言はどうかと思うぞ。俺はいたって普通だ。なあ、皆！！」

皆、サッと目をそらした。

「そ、そんな・・・・・・俺は普通じゃなかったってのか。」

「気づいて無かったことが驚きじゃのう。」

まさか、俺は化け物だったなんて・・・・・・そうショックを受けている俺に雄二が歩み寄ってきた。

「あきらめろ、守。Ｆクラスにいるんだ。常人なんて一人もいない。」

「そうか、そうだな。Ｆクラスだもんな。」

「そういうことだ。」

俺は納得して皆に向き合った。すると、島田と姫路がこちらを睨んでいる。

「どうしたんだ？二人とも。」

「吉田・・・・・・身長体重にスリーサイズまで見ただけで分かるってどういうことよ！！！」

「そ、そうです！！プライバシーの侵害です！・・・・・・最近ちょっぴり太っちゃいましたし・・・・」

「ああ、そのことか。大丈夫。俺は他言しないから。プライバシーについてはすまん。昔からの癖でな」

「守は何でそんな能力がついたの？」

「遺伝じゃねえか？」

「遺伝？」

「そ、俺の両親は世界的に有名なスポーツトレーナーらしくてな。今も世界中飛び回ってトップアスリート達を見てるんじゃないか？」

「そんなにスゴイ人たちなんだ・・・・・」

「どうなんだろうな。俺からしたらただのうざい親ばかだが・・・・・」

「トップアスリートってたとえば誰よ？」

「ん～、確かかなり前に柔道のＹＡＷ○ＲＡちゃんを見てたような・・・・・・・」

「何！？あの日本を代表する女性柔道家の！？」

「たぶん。最近はボ○トだったかな・・・・・フライングしたことをかなり怒ってた。」

「ほんとに吉田君のご両親はすごいんですね～」

「ま、そんなもんだ。それで親にガキの頃からつき合わされて気づけばこんな能力が身に着いた。」

「ふむ、となるとお前は防衛線や心理戦で無類の強さを発揮しそうだな。」

「ああ、確かにポーカーとかでそこまで負けた記憶がないな。」

「ポーカーフェイスは秀吉といい勝負じゃない？」

「何を言っておるのじゃ明久。わしは常に自然体じゃぞ。」

「確かにスゴイポーカーフェイスだな。俺でも見抜くのが難しかったぜ。・・・・・・・・・それとは別なんだが、木下は『秀吉でいいぞい。』・・・秀吉は本当に何なんだ？男か女かの根本的なところが分からない。」

「何言ってるのさ、守。女の子に決まってるじゃないか！！」

「何を言っておるのじゃ明久！！わしは・・『なるほど、やっぱり男装趣味なだけだったか。いや、すまんな秀吉。』・・だから違うのじゃーーー！！」

「そう考えると『だから儂は男じゃと・・・・・！！』Ｆクラスは女子の人数こそ少ないものの質が高くていいもんだな。『もう良い・・・・はあ・・・・・・』・・・・・・・・まあ、そのうち二人はもう予約済みみたいだけどな？」

そういって姫路と島田を見ると・・・・おーおー動揺してる。

「ななななな、何のことかしらね。まあぁぁぁぁぁったく分からないわ」

「そそそそそ、そうです。予約済みって何でしょうかね？それに何で私たちを見るんでしょうね！？」

「ま、あいつはかなり鈍感だぜ？ガンバレ。」

「「そんなことわかってます（る）！！」」

「おい、お前ら。そろそろ本当に作戦会議だ。Dクラスをぶっ潰すぞ。」

「「「「「応ッ（はいっ／ええ）！！！」」」」」

さて、Dクラス戦はどうなることやら・・・・・・・・

第5話～僕と皆とミーティング～後編（後書き）

どうでしたでしょうか。やっと主人公の能力（？）が決まりましたね。
説明不足感は否めないですが・・・・・正直チート能力ですよ。
未来予知にスカウターを着けたようなもんです。ところとところで活躍させたいです

作者にヒロイン案を！！ガチです！！どなたかいませんか～。
待っております。

感想・アドバイス・評価お待ちしております。

あまりにキツイとガラスハートの作者は死んでしまいますのでご理解を・・・・
ではまた次回。

第6話～俺と戦争とDクラス～（前書き）

かなり、遅れました・・・・理由は後書きで。

タイトルが変わったのは、遅いですが主人公の一人称の変化で変えました。

・・・・・・小説のタイトルも変えようかな・・・・

第6話～俺と戦争とDクラス～

昼休みも終わり、（明久は幸せそうに惚けていた。おかげで観察し放題だったがな。フフフフフフフフフ・・・・・・）『なんか悪寒が・・・・？』Dクラス戦直前だ。ただ、俺と姫路は振り分け試験を受けていないため、補充試験を受けなければならない。

「あ～～だりぃ・・・」

「まあそういうな守。俺はクラス代表としてお前がどのくらい戦力になるか確認しなけりゃならん。」

「姫路はどうなんだよ。」

「姫路は学年で知らないものはいないほどの秀才だ。問題ないさ。」

「へいへい、そうでごぜぇますか。」

「ま、お前も大丈夫だとは思うがな。」

「せいぜい期待に応えさせていただきますよ、代表様？」

「ハッ、言うじゃねえか。・・・・・じゃあな。」

「ああ、俺が行くまでに負けんじゃねえぞ。」

「誰に向かって言ってやがる。」

「それもそうだな・・・・・・・・・じゃあな。」

こうして俺たちＦクラスの戦いが始まった。

ーーーーーｓｉｄｅ明久ーーーーーー

「吉井！！木下たちが渡り廊下でＤクラスと交戦状態に入ったわ！」

そういいながら駆けてくるのはＦクラスの数少ない女子（？）の一人こと島田さんだ。こうしてみると全体的にスラッとした体形で背も高く足もきれいなのにどうも魅力に欠ける。なんでだろう？

「ああ、胸か。」

スラッとしすぎてるのもまた・・・・・・ね？

「あんたの指を折るわ。小指から順に、全部。」

ま、まずい。後ろに阿修羅が見える・・・・・・・・・・ハッ！？そうか！！これが・・・・これがスタンドなのか！！

「また変なこと考えてるでしょ？・・・・・・・・・・・・・・・腕も折るわ。」

今度こそマズイ。

「そ、それよりホラ、ま、まずは試召戦争に集中しないと！！」

現在前線に配置されているのは秀吉の部隊。そこから下がったところに僕のいる中堅部隊がいる。いつの間にか部隊長にされてたけど隊長になったからには隊員を導く義務がある。頑張らないと。

まずは戦場の雰囲気を感じよう。さあ、耳を澄ませてよーく戦闘の様子を聞き取るんだ。

『さぁ来い！！この負け犬どもが！！』

『て、鉄人！？い、いやだ！補習室は嫌ダアアァァァァァ！！』

『捕虜は全員この戦争が終わるまで補習だ！！終戦までどれほどかかるが分からんがここを出たころには趣味が勉強のまじめな学生に更正してやる！』

『お、鬼イィィィィ！！だ、誰か助け・・・ギャアアァァァァ！！！！（バタン！）』

『ふう、お？戦死者か。戦死者はぁぁぁぁぁ補習ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！』

『い、いやd・・・ギャアアアァァァァァァァァ！！！！』

よし、だいたいはわかった・・・・・・・・・・

「島田さん。中堅部隊以降の全部隊に通達を。」

「いいけど、なんて？」

「もちろん・・・・・・・・・・・・・・・総員退避！（キリ）」

「このバカ！！（ズバシュッ！）」

パンチをもらった・・・・・・・・・・・・・・・チョキで。

「目がっ！！目がぁっ！！！！」

ゴロゴロゴロゴロ・・・あまりの痛さに転がることしかできない。

「あんた部隊長でしょ！目を覚ましなさい！！臆病風に吹かれてどうすんのよ！！」

「せめてそのセリフはグーかパーで殴っていってほしかった！！だってその覚ますべき目が見えないんだよ！？」

「いい？吉井。うちらの部隊は木下の部隊の掩護でしょう？あいつらが消耗した点数を稼ぐ時間を与える重要な役割なの。そのウチらが逃げたらどうやってあいつらの時間を稼ぐっていうの？」

島田さんがやけにもっともらしいことを言う。けど、さっきの僕のツッコミはスルーなのかな？

でも、確かに彼女の言うとおりだ。そうだ、僕たちの働き次第でこの戦争を左右するかも知れない大事な役割だ・・・・・・それを僕は補習のペナルティが怖いからって逃げようとしたなんて・・・・・！

島田さん！君はなんて男らしいんだ。そこらの男よりよっぽど男らしいよ！！涙が止まらないよ！（あと激痛も）

「何かしら・・・・・？今吉井を殴らなきゃいけないような気が・・・・・・？」

「ごめん、僕が間違ってた。これからはこの戦争に勝利することだ

けを考えよう！」

「ええ、それに個人で負けているとしても多対一で戦えばいいわ。」

その通りだ。点数じゃ負けてるけどやり方次第では勝つことだって十分に可能だ。

「そうだね、よし、やろう！！」

「うん、その意気よ吉井。」

大丈夫、僕ならやれると意気込んでいたところに、伝令係が走ってきた。

ーーーーーside守ーーーーー

雄二と別れた少しあと、Ｆクラスで俺は姫路と共に回復試験を受けていた。教壇に立つのはわが学園始まって以来の才女と言われる高橋女史・・・・・・初めて見るな・・・・・・観察開始・・・・・・

ふむ、身長１６２ｃｍ。なかなか高いな・・・体重（自主規制）。ふむ、ノーコメントで。スリーサイズ・・・・・・ノーコメント。何？ノーコメントばっか？仕方ないだろ、女子のプライベートをそう簡単にさらすわけにはいかないんだよ。決して作者が考えるの面倒だったとかそんなんじゃない。・・・・・・・・・・なんか変な電波を受信した？ま、いいか。試験に集中しないとな。

「・・・・以上が注意になります。よろしいですね？」

おっと、説明してたみたいだ。聞いてなかったが。

「はい。」

と姫路。どれほどのもんなんだろうか。学年トップクラスというのは・・・・・・

「わかりましたー」

「では、最初は国語です。はじめてください。」

バサッ

カリカリカリ・・・カリカリ←俺

カカカカカカカカカカカカ！←姫路

おいおい・・・・ほんとに化けもんだな、学年トップクラスは。俺もそこまで低いというわけではないが自信なくすぜ・・・・。

「終了です。ペンを追いてください。」

国語終了。その後も淡々と進んでいき・・・・・・・

「では次が最後、保健体育です。」

キターーーーーーーー！！！

フフフフフ。人体を観察しつくした俺にとって保健体育などもはやお遊び！！これに関してはムッツリーニとはれるぜ。

「はじめてください。」

カカカカカカカカ！↑姫路

ズババババババ！！↑俺

フハハハハハハハハ！これならば姫路にも後れは取らん！！

「終了です。」

フハハハハハ・・・・・・・ん？終わりか。ちょっと点数低いな・・・・まあ、余計なことをしてたのが悪かったんだけど。

「では、二人とも頑張ってくださいね。」

「「はい！」」

そう言って教室を去る高橋先生。俺は追いかけて声をかけた。

「高橋先生。」

「あら？どうしました吉田君？」

「これを。」

そういって俺が渡したのは簡単かつ時間を取らないエクササイズの数々。

「これは・・・・・・？」

「簡単なエクササイズですよ。時間もとりませんから好きな時にできます。先生の悩みを解決するのにうってつけですよ。」

「っ！」

驚く顔をする高橋女史。そりゃそうだ、だっていきなり自分のプライベートをのぞかれたに等しいんだから。でも、俺はトレーナーとして見過ごすことはできないんだ。

「迷惑でしたらすいません。」

「いえ、ではありがたく受け取らせていただきます。では。」

そういて去っていく高橋女史・・・・・・・・・驚いたな、だいたいの人は初見で渡しても突き返すかうさん臭そうな目しか向けない。でも、あの人はそんなことなく目を通し、感謝までしてくれた。すごい人だ。俺自身こんなことをされたら突き返すだろうに・・・

おっと、惚けてる場合じゃない。戦争に・・・・行くか。

「待たせたな、じゅんびＯｋだ。」

「ああ、そうか・・・・お疲れだ、守。」

「どうしたんだ?雄二。」

「ちょいと悩んでてな・・・・・・」

「悩み？」

「ああ、実はな・・・・・・・・・」

ーーーーーｓｉｄｅ高橋ーーーーー

ごきげんよう。高橋洋子です。今日はＦクラスとＤクラスが試召戦

争をするというので回復試験の監督としてFクラスにきています。開始早々試験を受けるのはやはり、振り分け試験を欠席した吉田守君と姫路瑞希さんでしょう。姫路さんはともかく、吉田君は面識がないのでちょっとドキドキしますね。いい子だといいのですが・・・・

そんなことを考えてる間にFクラスに着きました。吉田君は・・・・悪そうな子ではないですね。

「では、回復試験を行いますが、カンニングなどの不正行為とみなされる行動をとった場合0点となりますので注意してください。そして、試験は時間の許す限りいくらでも解けます。替えの用紙を申請するのは余裕をもってして下さい。以上が注意になります。よろしいですね？」

私が説明している間、吉田君は微動だにせずにこちらを見ていました。けれど、その視線を感じた途端、少しの不安感が募りました。そう、まさに自分の内側まですべて見られているような、そんな感覚。しかい、それも、私が確認を取ったとたんに消え去りました・・・・やはり気のせいだったのでしょうか？

そして、試験が終わりました。吉田君は普通の教科は平均強、Ｂクラスの中堅並みでしょう。ただ、保健体育のみがずば抜けています。この点数なら、学年のトップクラスに入るでしょう。面白い子です。確か保健体育学年トップの土屋君もこのクラスのはずです・・・・・・ほんとに不思議なクラスです。

「では、二人とも頑張ってくださいね。」

そういって教室を出ます。すると、吉田君が追いかけてきました。

「高橋先生。」

「あら？どうしたんですか？吉田君。」

呼びかけられたことにビックリしましたが冷静に対応できました。

「これを。」

そう言って吉田くんが差し出したのは数枚の紙？ってこれは試験の問題用紙ではないですか。終盤何か真剣に書いていると思ったらこれだったのですね。

「これは・・・・・・？」

「簡単なエクササイズですよ。時間もとりませんから好きな時にできます。先生の悩みを解決するのにうってつけですよ。」

「っ！」

驚きです。確かに最近運動不足で体重が増えてきたし、肌も少し・・・・という状況です。しかし、誰にも言ってないのに・・・・・と思いつつ見ると私のような知識のない物でもわかるほど、効率のいいエクササイズでした。速読は得意なんですよ、エヘン。こんなものを考えれるなんて彼は何者なんでしょう。親がスポーツトレーナーだと聞いていますからそれでですかね？まあ、危ない物ではないでしょう。そんな私の沈黙をどうとったのかはわからないが、彼は申し訳なさそうな顔で

「迷惑でしたらすいません。」

と言った。それを聞いた瞬間何でかわからないが口が勝手に動いていた。

「いえ、ではありがたく受け取らせていただきます。では。」

そういった自分に驚き、なぜかそんな自分を見られたくなかったので、すぐに踵を返して職員室に向かいました。

エクササイズ・・・・・始めてみましょうか。

第6話～俺と戦争とDクラス～（後書き）

さて、ということでですね。理由の説明おば。
まず

体育祭・・・・練習や応援団でくたくた・・・・
←
風邪・・・・やっちゃったＺＥ☆
←
定期テスト・・・・・おぉふ・・・
←
現在に至ると・・・・

風邪がなければあげてたんですが・・・・はい、わかってます。
言い訳です。

しょうがないじゃないですか！！テスト勉強とか！！

・・・・あまり点はよくなかったけど。

アッ！やめて、石投げないで！！ということですいませんでした。

そうそう、ヒロインがだいたい固まりかけてます。
秀吉、優子、友香　（小山）、高橋先生あたり・・・かな？小暮先輩とか迷ってます。

今回の高橋先生もそれの関係です。絡ませ方が下手すぐる・・・・・・orz

こんな作者ですが、頑張ります。

感想、アドバイス待ってま～す。

第7話～俺と戦争とDクラス2～（前書き）

これで、休んでた時の分勘弁してください・・・・・・・・・・

本編どうぞ～

第7話～俺と戦争とDクラス2～

ーーーーｓｉｄｅ明久ーーーーーー

報告係の人がやってきた。

「島田！吉井！前線部隊が撤退を開始したぞ！！」

「総員退避よ！！」

・・・・あれ？さっきと言ってることが違うような？

「吉井、問題ないわよね？」

問題だらけの気がするが気のせいだろう。うん。

「そうだね、逃げよう。僕らには荷が重すぎた。」

「そうよね。ウチらは精一杯努力したわ。」

Ｆクラスへと方向転換・・・・したところで、Ｆクラスに配備されていた横田くんが目の前に。

「ん？横田じゃない、どうしたの？」

「代表より連絡があります！！」

メモを見ながらはきはきとしゃべる横田君。

「『逃げたらコロス』」

「「総員突撃しろぉー（よ）！！」」

気が付けば島田さんと共に戦場へ向けて全力ダッシュ。これもFクラスの勝利を思ってのことさ。

と、前方からこちらへ向かって走ってくる美少女を発見。

「明久、島田！助けに来てくれたんじゃな！」

ああ、なんだ秀吉か、いつ見ても可愛い・・・・

「秀吉、大丈夫？」

「戦死は免れておるが点数を削られてヘトヘトじゃ。これ以上の戦闘は無理じゃな。」

「そっか、じゃあ早く戻ってテストを受けてこないと。」

「そうじゃな。全教科は無理じゃろうが、1．2教科は受けてくるとしようかの。」

言うや否や秀吉と前線部隊の人たちはFクラスへと走って行った。

出陣した時より少ないのは補習室にいるからだろう・・・・・・・・・・・・・・南無。

「よし、彼らの分も時間を稼ぐぞ！」

そういって戦場へと向かった僕ら。

「吉井！見て！！やつら五十嵐先生と布施先生を引っ張ってきたわ。」

なるほど、学年主任だけじゃ時間がかかるから立会人を増やしたってことか。

「島田さん。科学の点数は？」

「自信なし。６０点台常連よ。」

さすがＦクラス。いい点とは言えないね。

「わかった。じゃああの二人を回避しながら進もう。」

目立たないように隅に向かい、体を小さくしながらこっそり進む。

気分は某蛇大佐。見るがいい、これが中堅部隊隊長と副隊長の勇姿だ！！

「あっ、そこにいるのは美波お姉さま！？五十嵐先生、こっちへ来てください！！」

「美晴！？くっぬかったわ。」

島田さんがＤクラスに見つかった。このままだと二人とも戦死は免れない。・・・・・・・・・・・・・・・仕方ないな。

「よし。島田さん。ここは君に任せて僕は先に行くよ。」

「なっ！？そこは『ここは僕に任せて先に行け！！』でしょ！？」

「そんなセリフ・・・・・・・・・・・・・・・リアルじゃ通用しない！！」

「吉井！このゲス野郎！！」

「お姉さま！逃がしません！！」

「美晴・・・・・やるしかないってことね・・・・」

先生からは十分に離れて島田さんの様子をうかがう。相手の子は召喚獣を呼び出し、島田さんもそれにこたえるように召喚を開始した。

「試験召喚（サモン）っ！」

その呼び声に応えて足元に幾何学模様が浮かび上がり、そこから姿を現す召喚獣。

その召喚獣は軍服にサーベルを持っていることを除けば身長８０ＣＭぐらいの『デフォルメされた島田美波』そのもの。

向こうも同じようにデフォルメされた自身の分身を従えている。

「お姉さまに捨てられて以来・・・・美晴はこの時を一日千秋の想いで待っていました・・・・・・・」

「いい加減ウチのことは諦めなさいよ！！」

いよいよ戦闘が始まると思うと全身に震えが走る・・・・・・・・・・・・んだけど・・・・

「ところで島田さん、お姉さまって――――――

「嫌です！お姉さまはいつまでも美晴のお姉さまなんです！！」

「来ないで！ウチは普通に男が好きなの！！」

「嘘です！お姉さまは美晴のことを愛しているはずです！！」

「この分からず屋！！」

・・・・・・・・・・・・なんだか、島田さんが、遠い・・・・・・・・・・

「行きます！お姉さま！」

二体の召喚獣が距離を詰める。

「はああぁぁぁぁぁぁ！！」

「やああぁぁぁぁぁぁ！！」

二人の気合が響き、召喚獣は真正面から激突し、力比べが始まった。

「こ――――――のっ！！」

「負けません！！」

激しいつばぜり合いを繰り広げる両者。だけど、まずいな・・・・・・

「島田さん！真正面からぶつかったら点数の低いこちらが不利だ！」

「わかってるわよ！でも、細かい動作は難しいのよ！」

直後、力負けした島田さんの召喚獣の獲物が吹っ飛ぶ。

『Ｆクラス　　島田美波』

化学　　５３点

『Ｄクラス　　清水美晴』

化学　　９４点

・・・島田さん、サバ呼んでたな。６０にも行ってないじゃないか。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「い、いやぁっ！補習室はいやぁっ！！」

「補習室？・・・・・フフフッ♪」

楽しそうに笑いながら清水さんは島田さんの手を引っ張っていく。・・・・・あれ？そっちにあるのは保健室だよ？

「さあお姉さま？今ならベッドは空いていますよ？」

「よ、吉井！フォローを！！いまのウチは補習室送りよりも危ない気がするの！！」

そうだろうね、僕もそう思うよ、でも・・・・・・・・・・

「殺します・・・・美晴とお姉さまの邪魔をする者は殺します・・・・・・・」

僕にそこへ突っ込む勇気はない。

「島田さん！君のことは忘れない！！」

「吉井！！なんで戦う前から別れに台詞を！？」

「邪魔者は殺しますっ！」

島田さんの召喚獣を動けなくすると、今度はこっちに向かってきたぁ！？

「吉井！助太刀するぞ！！」

「この声は・・・須川君！！君が救世主に見えるよ！」

『Ｆクラス　　須川亮』

化学　　７６点

『Ｄクラス　　清水美晴』

化学　　４１点

須川君の召喚獣が敵をたたっきる。おお、須川君の勝利だ！さっきの戦闘で点数が減っていたのが幸いしたな～

「島田、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫。・・・・・・補習の鉄じ・・・・・じゃない、西村先生。この危険人物を早く補習室へ」

「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやろう。こっちに来い。」

こうして、清水さんは補習室へと連行された・・・・・・

「お、お姉さま！美晴は諦めませんから！このまま無事に卒業できると思わないでください！！」

・・・・・とても危険な捨て台詞を残しながら・・・・・・・・・・・・

ふう、いろんな意味で危ない戦いだった。

「吉井。」

「島田さん、お疲れ。とりあえずいったん戻って化学のテストを受けてくるといいよ。」

「吉井。」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ！」

「吉井いいっ！！！」

「は、はいっ？」

「・・・・・・・・・・・・ウチを見捨てたわね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・記憶にございません。」

流石は戦場、スゴイ殺気だ・・・・・・主に後ろの島田さんから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばし沈黙・・・・すごく居心地が悪い。

「死になさい吉井明久！！試験召（サモ）ーーーーー

「誰か！！島田さんが錯乱した！！本陣に連行を！」

「どうした！？吉井？」

おお、須川君。君は僕のピンチをことごとく助けてくれる・・・・・・・まさにメシアだよ。

「島田！落ち着け！吉井隊長は味方だぞ！！」

「違うわ！こいつは敵！！ウチの最大の敵なんだからぁっ！！！」

ひ、否定できない。

「す、須川君。ヨロシク。」

「わかった。」

そういって須川君が島田さんを連行してくれた。助かった・・・・・・あの怨念のこもった目だけで殺されそうだったよ。ひとまず身の安全を確保だ。

「秀吉たちが補給を終えるまで、前線を維持するんだ！一歩も進ませるな！！」

さあ！ここが僕らの正念場だ！！

ーーーーーーｓｉｄｅ守ーーーーーーーー

現在俺は雄二と作戦会議中だ。何でも、悩んでいることがあるらしい。

「で？何なんだ？悩みってのは。」

「ほかでもない。立会の教師のことだ。人数を減らしたいんだが・・・・・・」

「なんだ、簡単じゃねえか。」

「違う。・・・・・・・・・・減らしつつも、明久を追い詰めたい。」

「なるほど・・・・・・・・・・それは多少悩むな・・・・・・」

考えてる間に島田と須川が入ってきた。っておいおい・・・・・島田のキレッぷりが半端ねえぞ、おい。

「吉井ィッ！ゼッッッッタイに許さないんだから！！」

あのバカ・・・・・また何かやったな？・・・・・・・・・・ん？・・・・・ハハッ、今のこととは全く関係ねえが思いついたぞ・・・・・・

「雄二。」

「なんだ・・・・・ってその顔は・・・・・思いついたか（ニヤリ）」

「ああ。（ニヤリ）それにこれならば味方の士気を上げることまで可能だ。」

「聞かせろ。」

「ああ。（ボソボソ・・・）」

「ッ！・・・・なるほど、素晴らしい作戦だ。俺では思いつかなかった。さすがだ、守。」

「へっ、こんな案採用してくれるとは・・・・器がでかいねぇ代表様？」

「フッ」

「ハッ」

ガシィっ！！！

その日、俺たちは魂で通じ合った。

「じゃ、早速だな。お～い、須川ぁ！」

「なんだ？吉田？」

「いや、これを全校放送で流してほしいんだわ。」

そういって計画を書いた紙を渡す。

「これは・・・・・わかった。必ず成功させよう。」

そういって教室を後にする須川。俺と雄二、言いたいことは同じ。

「「頼んだぞ。」」

様々な想いを乗せた俺たちの言葉に須川は一言

「ああ、行ってくる。」

そう答えた背中はとてもかっこいい物だった。

第7話～俺と戦争とDクラス2～（後書き）

感想、アドバイスお待ちしてます。

では、また次回。アデュー（＾－＾）／

第8話～俺と戦争とDクラス3～（前書き）

またもや、長期間空いてしまいました。

本当に申し訳なく思っております。m（＿＿）m

でわ、本編をどうぞ～

第8話～俺と戦争とDクラス3～

ーーーーｓｉｄｅ明久ーーーーー

戦争中だ。僕は指揮官として、みんなからの報告を聞いている。

「吉井隊長！横溝がやられた！布施先生側はあと二人だぞ！！」

「五十嵐先生側には今俺しかいない！援軍を頼む！！」

「藤堂の召喚獣が危ない！助けてやってくれ！」

聞こえてくるのは悪い知らせばかり。くっ、想像以上に劣勢だ。

本陣から応援が欲しいけど、そんなことをしたら作戦に支障が出る。

ここは僕たちだけで持たせるしかない！！

「布施先生側は防御に専念！五十嵐先生側は、総合科目の人と交代しながら効率的に勝負するんだ！藤堂君は諦めよう！！」

僕が一息に指示を出した瞬間、場の空気が凍った。

『おい、聞いたか？』

『ああ、ばっちしな。』

『まさか、あの吉井がな・・・・』

『ああ・・・・・・』

『『”効率的”なんて言葉を知っているとは・・・・・・・』』

「ちくしょうっ！皆なんてキライだっ！！」

みんな揃ってボクをバカにして！！・・・・・・・・違うよ！これは朝食べた塩水が（食べるとは言わんぞｂｙ雄二）目から出ているだけさっ！

「と、ともかく皆！よろしく。」

「「「「「了解！！！」」」」」

よかった・・・・・一応隊長として認めて、指示に従ってくれているみたいだ。

「Ｆクラスめ、何を狙ってるんだ？」

「明らかに時間稼ぎだぞ？」

「何かを待っているのか！」

しまった！僕らの作戦が気づかれかけている。さらにやりずらくなるな・・・・・・・・

「た、大変だ！！Ｆクラスが世界史の田中を呼んだとの報告が！！」

「何！！？世界史の田中だと！？」

「Ｆクラスめ！長期戦に持ち込む気か！？」

ちっ田中教諭が見つかったか。

田中教諭は初老のおっとりとした男性で、採点に結構時間がかかる。だから長期戦目的の僕らにとっては都合がいい。

「吉井、Ｄクラスは数学の木内（きのうち）先生を連れ出したぞ！」

須川君だ、さっき本陣に戻った時に情報を仕入れてくれたんだろう。木内先生は、田中先生とは対照的に、採点が厳しいが、早い。Ｄクラスは短期決戦を望んでいるようだ・・・・・・

でも、僕らは破られるわけにはいかない。僕らの任務は学校の授業が終わるまで、戦線を維持することだからだ。

悩んでいた僕に、救いの手が差し伸べられた・・・・・

「吉井、俺が偽情報を流して先生を減らしてくる！」

「す、須川君・・・・・・・なるほど、その手があった。よし！たのんだよ！！須川君！！」

「ああ、任せろ。」

そういって須川君は駆け足でこの場を離れて行った・・・・・妙に活き活きとしながら・・・・・・・

まあ僕は指揮官として後方から指示を出そう！・・・・・・・・・・・・補習室が怖いわけじゃないからね！ホントダヨ？

この時僕は気づいておくべきだった、まさかこの件があんなことになるなんて・・・・・・・・・・・・・

「くそっしぶといな！」

「今、船越先生を呼んだ！もうすぐだ！！」

くそっマズイ・・・・・早くしてくれ須川君・・・・・・・・

～side守～

須川が去ってしばらく何の音沙汰もなかった。

「あいつ、失敗したか？」

「いや、もう少し待ってよう。」

その時、教室に音もなく舞い降りた男が一人。

「ムッツリーニか、どうしたんだ？」

雄二が問うと、ムッツリーニは話し出した。

「・・・・敵は数学教師を用いて短期決戦に持ち込もうとしてる・・・・・・」

「くっマズイな、あいつらが持つか？須川、急いでくれ・・・・・」

ピンポンパンポ～ン

「「きたぁっ！！！！！！」」

俺たちは顔がにやけるのを止められなかった・・・・・・・

～side明久～

ピンポンパンポ～ン

「きたぁっ！！！」

待ってたよ！須川君！！これでかなり楽に・・・・・・・・・

『船越先生、吉井明久君が校舎裏で呼んでいます。』

・・・・・・・・・あれ？

『生徒と教師の垣根を越えた大事な話があるそうです。至急向かってください。繰り返します・・・・』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれえぇぇぇぇぇぇ！！？

須川君、わかってる！？相手はあの船越女史だよ！！？（ちなみに４５歳）婚期を逃しすぎて単位を盾に交際を迫るあの船越女史だよ！！！？

僕が行くまで絶対校舎裏で待ってくれてるだろうけど、その分僕の貞操が大変なことにぃぃぃぃ！！

「吉井隊長・・・・・・・・・・・・あんたぁ漢だよ！！」

「ああ・・・・・・まさかクラスのためにそこまでしてくれるなんて・・・・・・」

仲間たちが感激した様子で握手を求めてくる。

やめて！！戦場にいい影響を与えないで！！！

『おい、Ｆクラスの奴ら本気で勝ちに来てるぞ・・・・・・あんな犠牲すらいとわないとは・・・・』

『ああ・・・・・・すさまじいな・・・・・・・』

『あそこまでの意思を持っている奴らに勝てるのか・・・・？』

Ｄクラスにまで！もういやあぁっ！！

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな！！絶対に勝つぞ！！」

「「「「「おおおぉぉぉーーーーっ！！」」」」」

味方の士気も上がっちゃったし・・・・・・・これじゃ否定しずらいじゃないか！

「隊長！行けますよ！！この勢いで押し返しましょう！！」

畜生、こうなった原因はなんだ？・・・・・・・・・・・・・・・・・そうか、奴か。

「・・・・・・・・す」

「す？」

「須川あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

この日、僕の恨み手帳にまた新たな名が加わった。

～side守～

戦争が開始されてからかなりの時間がたった。もうそろそろ授業が終わる。それの意味するところはただ一つ。

反撃、開始だ。

「よし、みんな補充試験は済ませたな？明久たちが持たせてくれた前線に今より特攻をかける！！狙うはDクラス代表の首だ！行くぞ、皆！！」

「「「「「「「「「うおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」」」」」」」」」

雄二の激励に全員が気合のこもった返事を返す。すさまじい気迫だ。

さて、俺も与えられた仕事をこなしますか。

「よし、行くぞ姫路。」

「は、はい！」

そういった姫路は肩は張ってるわ、手は震えてるわでどうしようもないな。

「落ち着け。初戦争で緊張するのもわかるがそんなに固まると本来の実力が出せんぞ？気楽に行け。」

「そ、そうですね。」

「それにだ、何のために俺がわざわざ一緒についていくと思ってるんだ？」

「そうですね！よろしくお願いします。吉田君。」

「おお。んじゃ、行くか。」

「はいっ！」

いい感じに緊張はほぐれたみたいだな。よかったよかった。

～ｓｉｄｅ明久～

「工藤信也、戦死！！」

「西村雄一郎、総合残り４０点！！」

「森川が戻らない！！やられたのか！？」

戦うことしばし、残念ながら戦力差が表れ始め、次々と悪い情報ばかりが飛び込んでくる。さらに、工藤君と森川君がやられたことによって僕の隊は残り５名。いよいよ厳しい状況だ。そろそろ限界だろうか。（僕の精神衛生的にも）

「明久ぁっ！、あと少し持ちこたえろ！！」

撤退を考えていた矢先、聞きなれた声で檄が飛んできた。声のほうを向くと、やっぱり雄二だ。援軍もつれている！！

「援軍だ！合流される前に隊を壊滅させろ！！」

Ｄクラス代表の平賀君の声。っていうかまずい、合流する前に全滅なんてさせられたら、補修室行きじゃないか！！

「西村雄一郎、戦死！！」

残り４名。マズイ。

「五十嵐先生、Ｄクラス鈴木が召喚します。」

「くっ、Ｆクラス田中も行きます。」

田中君が捕まったか！

Ｄクラス　鈴木一郎

化学　９２点

ｖｓ

Ｆクラス　田中明

化学　６７点

刀で一刀両断される田中君の召喚獣。

これで残り３人か！！マズイマズイマジマズイ！！！

向こうはココが正念場だと感じ取ったのか、戦死を恐れずに突っ込んでくる。

柴崎君が鈴木君を倒したが、次の召喚獣が迫っている。疲弊した柴崎君では無理だ！僕が出るしかない。

Dクラスの笹島君が召喚獣を伴って、突っ込んでくる。立ち位置的に、召喚範囲内だから、応戦しないと補修室送りだ。

仕方ない。

「吉井明久！その首もらったあぁぁぁ！！」

やるしかない！

大きく息を吸って気合を入れる。

「負けてたまるかあぁぁぁぁ！！」

敵が突っ込んでくるのに合わせて、僕はあの言葉を叫ぶ。

「試験召喚獣召喚！！試験召喚（サモン）ッ！！！！」

第8話～俺と戦争とDクラス3～（後書き）

どうでしたでしょうか。感想、指摘バッチコイですのでよろしくお願いします。

さて、今回の理由は・・・・・・・・・・・二大学園行事の一つ！文化祭だぁぁぁぁ！！

ええ、文化祭執行委員として奔走してました。かなりキツイッス。

まあ、これであらかた行事は終わったので、また一週間一話投稿ぐらいには戻せるかと。

まあ、気分で結構変わります。作者気分家なんで。まあまた、行事など（おもにテスト）がある場合は一応活動報告に載せときますので～

ではまた次回。

（＾＾）ノシ

第9話～俺と戦争とDクラス4～（前書き）

ちょっとやるき出しました。結構きついです。

もうこのペースはむりポ

まあ、とにかくどうぞ～

第9話～俺と戦争とDクラス4～

～side明久～

「試験召喚(サモン)ッ！！」

叫んだ途端、僕の足元に広がる魔法陣。そしてそこから現れる特攻服に身を包んだもう一人の僕。

「Fクラス中堅部隊隊長吉井明久！貴公の相手を・・・・・・・・・ウグフッ！！！」

いきなり、肩への激痛が！このバカ！！なんでわざわざ敵の進路に出てくるんだ！！！痛みにフィードバックって結構つらいんだぞ！？

「・・・この部隊長は『バカ』だ！ここは俺一人に任せろ！皆は残りを！！」

何か失礼なことを言われてるし！違うもんね！！これは召喚場所が悪かっただけさ！！

「くたばれ吉井！！」

そういって召喚獣を突っ込ませてきた！だけど！！

「そうはいくかっ」

低い体勢からそのまま横っ飛び。そして・・・・・

ひょいっ

相手の召喚獣にタイミングを合わせて、足をかける

「なっ！？」

あっけなく転ぶ笹島君の召喚獣。

よし！相手が驚いている今がチャンスだ！！

「ああっ！霧島さんのスカートがめくれてる！！」

Dクラスの背後を指す。

「「「「「なにぃっ！！」」」」」

一斉に振り返る皆。

すごい・・・さすがはAクラス代表。

学年主席で才色兼備。霧島翔子（きりしましょうこ）さんDクラスだけでなく、Fクラスの男子、果てには女子も振り向いている。

・・・・女子の皆さんは男子に興味を持とうよ。せっかくの共学なのに・・・・・・まあ、霧島さんは女の子が好きみたいだからいいけどさ。

そんなことを考えながらも、僕は行動を止めない。皆の注意がそれた今、その隙を利用して窓ガラスに靴を投げつける！

ガッシャアァァァァン！！

粉々に砕け散る窓。

『な、なんだ！？なにがあった？』

よし、皆の注意がさらにそれた！いける！！

「うわっ、島田さん！！そんなものをどうする気！？」

今後の保身のためにも一芝居打ちながら、壁の消火器をつかみ、安全弁を引き抜きそして・・・・・・

ブシャアァァァァ！！！

あふれ出る消火器の粉末。

「う、うわっ！なんだ？」

「こ、これ消火器の粉じゃねえか！！」

「くそっ、前が見えない！」

これで視界はさえぎった。戦闘続行は困難だろう。

「島田さん！君はなんてことを！！」

念を入れてもう一芝居。これで皆島田さんが犯人だと思ってくれるはずだ。

「Fクラスの島田か！！なんて卑怯な野郎だ！！」

「彼女にしたくないランキングに載せてやる！！」

「でも、男らしくて素敵・・・・・・・・お姉さま・・・・・・・・・・。」

・・・・・・・・なんだか骨の1．2本じゃすまないような気がする・・・・・・・

島田さん！君の犠牲は無駄にはしない！！！

尊い犠牲に黙とうを捧げた後、振り返ると雄二たちがすぐそこまで来ていた。よし、これで合流できる！

「だらあぁっ！」

空になった消火器を投げあげ、スプリンクラーに当てる。これで・・・・・・

シュワァァァァァ――――――――――

スプリンクラーが作動。まっていた粉を落とし始める。そしてそこに飛び込んでくる人影。

「待たせたな、吉井！五十嵐先生！Ｆクラス近藤吉宗が行きます！！」

間違いない。Ｆクラス本隊のうちの一人、近藤君だ！

『試験召喚（サモン）ッ！！』

Ｄクラス　中野健太

化学　４３点

ｖｓ

Ｆクラス　近藤吉宗

化学　　９１点

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！！」

敵部隊長である塚本君の声が聞こえてきた。それと共に退いていくDクラスの人達。

「深追いはするな。俺たちも明久たちを回収後、いったん戻るぞ。」

これはうちの代表雄二の声だ。おそらく、追って行って敵の本隊が出てくるのを嫌ったからだろう。そうでなければ高笑いしながら追撃を容赦なくかける男だから・・・・・・

「さて、無事か？明久。」

「まあ、なんとかね。」

とにかくこれで一段落。窮地を脱することができた。

僕らは部隊を立て直すため、戦場を後にした・・・・・・

教室に戻り、化学のテストを受けた後、

「明久、よくやった。」

我らがクラス代表からこんな言葉が送られてきた。

「ああ、さすが明久だ。すごかったぞ。」

こちらは転校生からだ。こんなに僕をほめるなんてどうしたんだろう？

そこで気づいた。雄二がムカつくくらいに晴れやかな顔を浮かべ、守がニヤニヤしながらこっちを見ているのを。

さてはこいつら・・・・・・

「さっきの校内放送・・・・・聞こえてた？」

「ああ。」

と雄二。

「ばっちりな。」

と守。息ぴったりだ。っていうより、僕の不幸を喜んでやがる！許せん！！

だが、今の僕は雄二ごときに構っている暇はない。まず粛清を加えなければならない奴がいるのだから。

「雄二、守。須川君がどこにいるか知らない？」

「ん？知らんが、須川になんか用なのか？明久。」

「いや、別に用事って程じゃないんだけど・・・・守は？」

「すまんな。俺も知らんぞ。」

「そっか。」

ああ、どこにいるんだろう愛しい須川君。隠れている可能性もあるが、その時は草の根を分けてでも探し出す！

「須川ならもうすぐ帰ってくるんじゃないか？」

高石君による嬉しい情報。もうすぐ帰ってきてくれるのか。心臓の鼓動が早くなって止まらないよ。

・・・よし、落ちつけ僕。包丁は家庭科室からパクってきたし、靴下に砂もちゃんと詰めた。

「殺れる、僕なら殺れる・・・・・」

「殺るなっての。」

雄二が何か言っているけど、どうでもいい！！

「ちなみに、あれを指示したのは・・・・」

ええい！！うるさいな雄二！今の僕の最優先事項は・・・・・・

「「俺たちだ」」

こいつらだあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

「シャアアアアアアア！！！！！」

左手の包丁は致命傷になりやすい肝臓へ、右手の即席ブラックジャックは守の頭上へと・・・・・

「「あ、船越先生」」

「チイィッ！！」

今は僕の貞操のほうが大事だ！撤退！！

～side守～

明久が教室に帰ってきた。ヤバい。顔がにやけるのを止められない。
隣の雄二を見ると、あいつも同じようだな。
そのまま眺めていると、何かに感ずいたのか、少しイラッとしながら
「校内放送・・・聞いてた？」
と、聞いてきた。俺と雄二は、特にお互いを見たりはしなかったが、
「ああ。」
と雄二。
「ばっちりな。」
と、俺。みごとなコンビネーションだぜ。
一瞬、明久がこっちに向かってくるかと思ったが、何とか踏みとど
まったらしい。大方、犯人を須川だとでも思っているのだろう。バ
カめ。
まあいい。もう少し様子見と行こう。
「雄二、守。須川君がどこにいるか知らない？」
やはり須川が犯人だと思っているのか。雄二もわかったようで
「ん？知らんが、須川になんか用なのか？明久。」
「いや、別に用事って程じゃあないんだけど・・・守は？」

「いや、俺も知らんぞ。」

努めて平静を装って返事をする。

「そっか。」

お、明久がだんだん限界に近づいてきたぞ・・・・・と思ったらいきなり包丁と砂のズッシリ詰まった靴下を取り出しやがった。おいおい、顔が軽く狂ったやつの顔をしてるぞ。

「殺れる、僕なら殺れる・・・・・・」

軽いホラーだな、おい。

「殺るなっての。」

雄二のツッコミも聞こえていないようだ・・・・・・・そろそろか？

雄二にアイコンタクトを送る。

うなずく雄二。

「ちなみに、あれを指示したのは。」

息を吸って一言。

「「俺たちだ。」」

その瞬間、明久がこちらに振り向き、包丁とブラックジャック（？）

を持って襲いかかってきた。コワッ

が、対処法は考案済み。

「「あ、船越先生」」

「チイィッ！！」

やはり効果はてきめんだ。明久は神速でロッカーに飛び込んだ。やはりバカだな。実際にいるわけがないだろうに・・・・・

さて、そろそろ決着(けり)を付けますか。

第９話～俺と戦争とＤクラス４～（後書き）

感想、アドバイスお待ちしてま～す。

さて、ちょっと聞きたいのですが、この話を更新する際、３０００～５０００文字で週一更新をしたほうがいいか、２０００～３０００弱くらいで、週２．３回投稿にすべきか悩んでいます。

こうしたらいいんじゃない、こうしてほしいというのがあればよろしくお願いします。

第１０話～俺と戦争と終結と～（前書き）

一週間に1話投稿にします。ノッタ時は2話投稿するかもしれませんが・・・・・・・まあ、本編をどうぞ。

第１０話～俺と戦争と終結と～

～ｓｉｄｅ守～

明久がロッカーに隠れた後、俺たちはこの戦争にけりをつけるべく教室を後にした。

まあ、もちろん明久に『さっきのは嘘だ。』と雄二が言っておいてくれたがな。

後ろから『騙したな、雄二いぃぃぃっ！！』とか声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

・・・・何？俺は何で対象に入ってないかだって？おいおい、明久は馬鹿なんだぞ？忘れてるに決まってるじゃないか。

それはともかく、俺は姫路と共に皆とは別行動をとってる。

なぜか・・・簡単な話だ。俺と姫路は特別任務、つまり今回の作戦のシメ、Ｄクラス代表平賀の首を取ることだからだ。

向こうは姫路がＦクラスだとは思いもしないだろうから、完全に虚を突けるし、俺も去年は完璧に平凡な生徒を装ってたからな・・・・マークされてないはずだ。

そう、そうなんだよ！俺は去年はフッツウの生徒だったんだよ！！
誰にもばれることなく、平穏な生活だったのにFクラスに来た途端、隠してた素がばれるわ、能力もばれるわでどうなってやがんだ！ほんと、振り分けの時に熱出した自分をぶっ殺してえ。

まあ、Fクラスにきて、退屈はしなくなったがな・・・・・ただそれだけだ！教室は汚いし、教師からの視線は最悪だし（常に犯罪者予備軍を見る目で見られてる）周りはバカばっかだしぃぃぃぃぃぃ！！

そんなことを考えていると、姫路が遠慮しながら尋ねてきた。

「あ、あの、吉田君？ほんとに相手の代表の首を取るときは相手の真正面に普通に歩いていって勝負を申し込むだけでいいんですか？」

「ん？ああ、大丈夫だろ、何しろ学年次席にいた姫路がFクラスにいるなんて誰も思わないだろ。」

「で、でも吉田君は・・・」

「俺のほうも大丈夫。去年は目立たない普通の生徒だったんだぜ？今はもう開き直ったがな。・・・・・・・Fクラスにさえ来なければ今年も平凡な生徒として・・・くそっ・・・ブツブツ・・

・・・・・」

「あ、あの～吉田君？」

ハッ、いかんいかん、またマイナス思考に陥ってた。

「ま、まあとにかく大丈夫だ。念には念を入れて、俺も補助として入ってるしな。姫路ほどではないにしろ、CかB並みの戦力にはなるはずだ・・・・・保健体育を除いてな。」

「確かに、あのスピードは凄かったですもんね～」

「いやいや、お前ほどじゃないさ、確かに保健体育においては少し、俺が早いかもしれんが、お前は全教科をあのスピードだろ？驚異的だぜ。お前が2位だってんならトップはどうなってやがんだ。」

「翔子ちゃんは頑張ってますから。」

「そうか、姫路も頑張らないとな？主に恋愛を・・・・」

「ちょ、よ、吉田君！？」

うろたえる姫路。これぐらいでうろたえてるようじゃまだまだかかりそうだな。あの明久（バカ）は鈍感（バカ）だしなぁ・・・・

「ま、俺は中立を保たせてもらうよ、島田に恨まれそうだしな。」

「もうっ、吉田君？」

「はいはい、ま、緊張はほぐれただろ？行こうぜ。」

「あ・・・・・・」

ふう、あんまりこうゆうのはキャラじゃないんだけどな・・・・・・

歩き出す俺たち。俺はさっきのことが少し恥ずかしく、無言だし、姫路も姫路でまだあって日が浅いからか、話しかけずらいみたいだ。女の子に気を使わせるわけにもいかんな。

「そうだ、姫路はどうして明久のことが好きになったんだ？」

「ふぇっ！？」

奇声をあげる姫路。おーおーおたおたしてる。

そのままその姿を鑑賞していると（小動物みたいで癒されるわぁ）何とか、持ち直したみたいで

「そ、その、小学校のころなんですけど・・・」

「ふむふむ。」

「私、そのころすごく太ってたんです。」

へえ、そりゃ意外・・・・・でもないかな。うん。ある一部分が育ったのもそれが少しの理由ではあると思うし。

「それで肌が白いのも手伝って、皆からは『雪だるまみたい』って言われて『ユキちゃん』ってあだ名がついたんです。私は太ってるのが嫌だったからあんまり好きになれなくて・・・・・・それに

他の男の子から太ってるのをバカにされてて、その時に明久君が助けてくれて。（ボソ）このウサギも・・・・」

・・・なるほど、そんなことが。最後はよく聞こえなかったがな。明久は他人のために本気で怒れるやつだからな。まあ、惚れるのも仕方ない、か。

そんなことを話しながら廊下を歩いていると、前方が騒がしくなってきた。そろそろか・・・・・

「姫路、そろそろ戦場だ。集中しろよ。」

「はいっ！！」

うん、気負って肩に余計な力も入ってないし、大丈夫そうだ。じゃあ行くか・・・・・・この戦いに終止符を打ちに！！

「援軍に来たぞ！もう大丈夫だ。皆落ち着いて囲まれないように動け！！」

お、あれはＤクラス代表の平賀じゃないか。良かった。出てきてくれたか。

そんなことを考えている間に雄二率いる本隊が相手に囲まれ始めた。そこまで長くはもたないだろうから、急がないとな。

明久はまだ雄二を狙ってるようだ。まあ、あいつのもとに行けなくてイライラしてるようだが。

「一度撤退しろ！！人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

こんな時でも雄二の声はよく通るな。ん？俺たちはって？下校中の奴らにまじって歩いてるよ。全然ばれねえでやんの。姫路の効果かねぇ。

そんなこんなで逃げ出すＦメンバー。しかしＤくらすがそんなことを簡単に許してくれるわけもなく・・・

「逃がすな！個人の戦力なら俺たちのほうが上だ！追い詰めて討ち取れ！！」

個人戦を仕掛けてくるだろう。そこまでが狙いどうり！俺たちの勝ちはもらったぁ！！

「チャンスッ！」

お、明久が仕掛けに行った。あいつ怒りで作戦を忘れたかもしれんと危惧していたが、大丈夫みたいだな。良かった。

よし、じゃあそろそろ仕上げだ。俺たちは気づかれることなく対象に近づき、殺る。

「あ！あいつはＦクラスの奴じゃないか！！行くぞ！」

・・・・・・・そう、気づかれることな・・・・・・・く・・・・・・

「なんでだあぁぁぁぁぁぁ！！！！」

いやいや！！なんでばれたの！？そして何で姫路はノーカンなの？何で俺だけ！

「くそ、あの野郎、姫路さんを隠れ蓑にして近づこうとはな、なかなか頭が回りやがる。」

Ｄクラスの誰か。なるほど、姫路がＦクラスだというのはわからな

かったみたいだ。いや、良かった・・・って

「何で俺がＦクラスだってわかったんだあぁぁぁぁ！！」

「当たり前だ！だってお前、なんか・・・・・Ｆクラスっぽい（変人っぽい）空気してたもんよお」

「・・・・・・・・・・ｏｒｚ」

そんな馬鹿な、俺があの変人の巣窟であるＦクラス特有の雰囲気を持っていた・・・・だと・・・？そんな！！俺は一般人のはずだ！！【ありえませんｂｙ作者】

「それになぁ！」

まだ畳み掛けてくる気か、Ｄクラスモブ１よ。

「お前、何仲良く姫路さんと談笑してんだよおオォォォォォォォ！！！！」

「いや、そっちが本命かよ！！」

くっ、つきあってられん古来からこんな時やることは一つ。

「じゃ！」

風になれ！俺！！

ダッシュする俺。

「ああ！まだ裁きは終わってない！待てやこらあぁぁ！！行くぞ皆！！」

「「「「「応っ！！！！」」」」」

気合の入った返事をするFクラスの面々。

「いや、おかしいだろ！！？何でお前らまじってんの！？戦争は！？」

「相手は蹴散らしてきた。裁きに邪魔だったのでな。」

「その実力と気力はほかのとこに使え！！」

「ともかく奴は異端者だ！デス＆キーーール！！」

「それ両方とも俺死ぬじゃん！！」

ちくしょう、やっぱこいつらイカレてやがる！

そんなことを考えながら、俺の逃走は始まった・・・・・

逃げ始めて、数分。

ドンっ！

「キャッ！」

おっと！誰かに当たっちまったみたいだ。声からすると女か？

そう思い目線を下げるとそこにいたのは・・・・・・

「秀吉？・・・ではない？」

秀吉に瓜二つな女子。どこが違うかと言われれば、顔の細かい部分のパーツと雰囲気。なんか全体的に秀吉よりツンツンした印象を受ける。

「いった～、ちょっとあなた！！どこ見てるの？廊下を走らないでよ！って！？ちょ、ちょっと放して！」

そういわれて、今の体勢を考える。ふむ・・・・抱きかかえてるような格好だな。っていうか、顔が赤いぞ？風邪か？

「風邪か？顔が赤いみたいだけど。」

「な、なんでもないわ！と、とにかくいったん放しなさい！！／／／／」

「すまんすまん」

そういって、態勢を解く。少し残念そうに見えたのは気のせいだろう。

「じゃ、俺急いでるから。」

「え？ちょ、まっ『『『『見つけたぞ！！！』』』』・・・・は？」

「やべっ、今度こそ、んじゃ！！」

そう言って、俺は走り出した。

「・・・・・誰かしら、あいつ。また、会えるわよね。」

背後の女子がそんなことを言っているとは知らずに。

結局、その女子とはすぐに再開することになる。

・・・・・・意外な場所で。

あ、ちなみにDクラス戦は勝利。明久曰く

『姫路さんの大剣で一刀両断だった』らしい。さすがだな。

第１０話～俺と戦争と終結と～（後書き）

どうだったでしょうか。感想、アドバイスお待ちしてま～す。

第１１話～俺とバカと戦後会談～（前書き）

特に無いっす・・・・・・・どうぞ～

第１１話～俺とバカと戦後会談～

～ｓｉｄｅ守～

Ｄクラス代表、平賀源二（ひらがげんじ）討死

「「「「「うおおぉぉぉぉぉぉ！！！！！」」」」」

その報せを聞いた瞬間、全員の歓声が響き渡った。・・・・・うるせえ。

俺たちはここで終わりじゃないんだからもっと気を引き締めていかないと。

・・・・・明久の為にもな。やれやれ、できの悪いクラスメートを持つと苦労するぜ

「なんか、今とても失礼なことを考えられた気が・・・・・・」

「気のせいだろう。」

ちい、このバカ、カンがよくなって来てやがる。めんどくさいな・・・・

『すげえ！まさか本当にＤクラスに勝てるなんて！！』

『ああ、坂本のおかげだな！』

『坂本、万歳！！！』

『姫路さん、愛してるーーー！！』

・・・・バカが一名紛れ込んでるな・・・・ってあれ？こいつら全員バカじゃん！

「あー、まあ、なんだ。そんなに褒められても困るっつーか・・・・」

お？坂本が照れてるな・・・・珍しい。そんなことを考えている俺の横を何かが凄まじい速さで駆け抜けていった。その正体は・・・・・・・

「何やってんだ？ムッツリーニ。雄二の写真なんかとる必要ないだろう？」

・・・ムッツリーニだった。しかも熱心に雄二を撮っている・・・・・雄二を？

よし、考えてみよう

雄二＝男

ムッツリーニＬｉｋｅ＝女子

ムッツリ商会の商品＝女子の写真

・・・・・・・・・天変地異の前触れか！！？

「・・・・・・・・・得意客がいる」

「・・・・・雄二の写真目当ての？」

「・・・・・・・・・（コク）」

「・・・マジかよ。」

世の中は広いな・・・・・・・いや、別に雄二がブサイクというわけじゃないが、あいつは一種、近寄りがたい雰囲気があるからな・・・・・・あ、だから写真。納得。

と、俺の中で勝手にまとめていると、ムッツリーニはどこかに行ってしまった。おそらく現像だろうが・・・・・

『坂本、握手してくれ！』

『俺もだ！！』

もはや英雄だな、雄二の奴。スゴイスゴイ。

「僕も、雄二と握手を！！」

・・・ん？明久じゃないか、手に包丁持って何してんだ？そんなもんが雄二に効くわけ「ぬおっ！！（ガシィッ！）」・・・・ないだろうに。

「雄二、何で手首を抑えるのかな・・・・？」

「抑えるに・・・・決まってんだろうが・・・・フンっ！！」

カランカラン・・・・・明久の握っていた包丁が床に落ちる。さて・・・・・・Ｏ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩだな♪

「おーい、誰かペンチを持ってきてくれ～」

「こっちにはのこぎりな～できるだけいそいでくれ～」

「待って！！雄二のペンチは何に使うかわからないけど、守ののこぎりはもはや明らかな殺人予告だよね！！？」

「何を言ってるんだ、明久。ちょっとしたＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩだよ。・・・大丈夫。痛いのは一瞬さ・・・・・・・・・フフフフフフフフフ・・・・・・」

「コワッ！！！！！お願い、許して！まだ死にたくない！！」

・・・仕方がないなぁ

「わかった。」

「ホッよかっｔ「ということで、雄二ヨロ」・・・え？」

「おう、任せろ。」

そこにいたのは、ペンチを持った鬼、もとい雄二。見ようによっては悪魔だな、スッゲエニヤニヤしながら、明久に迫ってるもん。

「ス、ストップ！！僕が悪かった！だから・・・・・」

「チッ仕方ねえ・・・」

おお、我慢したか、偉いな。

「・・・・・生爪・・・・ブツブツ・・・・・」

訂正、結構漏れ出てた。

「まさか、姫路がＦクラスとはな・・・・・油断してたよ。」

後ろから、平賀の声が聞こえた。そういえば今は戦後会談だったね、忘れてたよＤクラス。だって代表からして地ｍ・・・・・いや、やめておこう。

「あ、その、さっきはすいません」

相変わらず律儀だな、姫路は。

「いや、謝る必要はないよ。Ｆクラスを舐めてた俺たちが悪い。」
これも勝負だからな、よくわかってるな。派手さはないが、いい代表だ。
「ルール通り、教室は明け渡す。だけど、今日は遅いし、また明日でいいか？」
やはり、かわいそうだな、平賀はこれから三か月、クラスメートに恨まれながら、Ｆクラスで過ごすのか・・・・・本当に戦争だな、これは。勝てば官軍、負ければ賊軍ってか。
「いや、その必要はない、俺たちはＤクラスは必要ないからな。」
ああ、目標のＡクラスのために、ここで満足されちゃたまんないからか。
「え？何で？雄二。せっかく普通の設備が手に入るのに。」
「俺たちの目標はＡクラスだろう？忘れるな。」
「忘れてなんかいないよ！でもそうなら、何で最初からＡクラスに挑まないの？」
・・・バカだなぁ、明久は。少しは考えろよ。
そんな俺と考えは一緒だったようで雄二も
「まったく、少しは考えろ。そんなんだから近所の中学生に『馬鹿

なお兄ちゃん』なんて不名誉な呼ばれ方をするんだ。」

「ちょっと、半端にリアルな嘘をつかないでよ！！」

「そうだぜ、雄二。中学生じゃなくて、小学生の間違いだろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・人違いです。」

そう言いながら、明久は俺と雄二から目をそらす。

「ま、まさか・・・・・本当に言われたことがあるのか・・・・・・？」

「明久、おぬし・・・・・・・」

と秀吉。久しぶり。出てこなかったのは作者が忘れかけてたとか、そんなんじゃ断じてありません。ありませんったらありません。

「・・・・・・・屈辱的。」

ムッツリーニも容赦がないな。

「吉井、あんたこれほどなんて・・・・・」

「よ、吉井君。頑張ってくださいね？」

島田に姫路まで、この有様だ。明久・・・・・いつも俺の予想の斜め下を（断じて上ではない）凄まじい速さで突っ切って行ってくれるぜ。

・・・・だが、そこに痺れる、憧れるうぅぅぅぅ！！！

訂正。憧れはしないわ、マジで。小学生にまで『馬鹿』と言われれるとは・・・・・・

「や、やめて！！そんな目で僕を見ないで！！！」

「と、とりあえずだ。Dクラスに手を出すつもりはない。」

「あ、ああ。わかった。」

ほら見ろ、雄二も平賀もショックから抜けきってないじゃないか。

「でもほんとにいいのか？・・・・・・・そりゃあ、うち的にはありがたいが・・・・」

「もちろん、一つ仕事をしてもらう。」

「一応聞かせてくれ。」

「なに、簡単なことだ。俺たちが合図したらBクラスの室外機を壊してほしい。それだけだ。」

「あ、そうそう。Bクラス戦の時にこの教室を貸してくれるとありがたい。」

これは俺。何をするのかって？秘密さ今はまだ・・・・・な。

「それぐらいなら構わないよ。室外機は多少叱られるかもしれんが・・・それで教室が守れるのなら。」

「タイミングは追って連絡する。今日はもう帰っていいぞ。」

「そうか、お前らがAクラスに勝てるよう祈ってるよ。」

「本音を言えよ、平賀。勝てるわけないと思ってるだろ？」

正直、俺もそう思うだろうしな。

「いや、お前らなら案外やってくれそうな気がする。それにいまだに実力のわからないお前がいるしな。吉田。」

「いやいや、俺はただの凡夫さ。そんなたいそうなもんじゃない。」

「ふうん？ま、いずれわかるさ。」

ま、それじゃあな。そういって平賀は去って行った。なんか、俺超高評価されてたけどなんでだ？（守は逃げながら、Dクラスのメンバーと、Fクラスのメンバーを全員補習室に送ってます・・・・・・・・・・無傷で。）

「それじゃあ雄二、守僕たちも帰ろうよ。」

ふと窓の外を見ると、見事な夕焼け。もうそんな時間か・・・・結構長い間戦ってたんだな。腹も減ったし、今日の晩飯なんにしよう。

「ああ、そうだな。」

そんなことを考えながら、答える。そんな時・・・・

「あ、あの坂本君！少しいいですか？」

姫路が、坂本に迫っていた。

ブルっ！・・・・・・なんだ！？今とてつもない寒気を感じたぞ！！？だ、誰の殺気だ？

が、その殺気は、姫路が雄二から離れた途端霧散した。俺は理解した。

・・・・・・・・・・・雄二。お前も厄介なものに目ぇつけられてんだな。

俺は直感でそう感じた。

話をもどそう。まあ姫路が聞きに行ったのはおそらく、この戦争の理由だろう。俺がそれっぽいことを姫路に聞かせたからな。例えば・・・・・・・『そういや何でこんな戦争めんどくさがりの雄二や明久が始めたんだろうな～？』などと言ったことを時折、独り言で言ってた。

まあだいたい理由はわかってるし、俺が出る必要もないし帰るか。

そう思い、明久に声をかけようとすると、あのバカは微動だにせず、なお且つ珍しいことに何か考え込んでいるようだ。

何考えてるんだろうか？

「おい、明ひｓ・・・・・・・」

声をかけようとした瞬間に、明久の悪魔（？）が現れた。明久に悪魔の羽を生やして、デフォルメされるとこんな感じになるだろう。

そいつは、明久になぜかプラカードで筆談に及んでいる。おかげでこっちも見やすくていい。何でこんなものが見えるかはこの際ほっとこう。

『チャンスだぜ、明久。パパッと捲っちまえ！あんなかわいい子のスカートの中なんて、ムッツリーニでもなければそうそう拝めるも

んじゃねえぜ？』

…………………………………………………明久……

……………そんなに飢えてたのか………………

いや、まだ早い。こういう時は、まず悪魔が出てきて、そのあとに天使が出てくる。明久の天使がもうそろそろ出てくるはず・・・・・

・・・・・

・・・出てくる、はず・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・出て、くる、は、ず・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

出、て…………………………………………来ねえじゃねえか!!!

明久!お前に正義の心と、天使はいないのか!!?

そうこうしていると、姫路と雄二の話は終わったようだ。これで一層明久に惚れ込んだな、姫路は。

すると、明久が凄まじいほど怨念のこもった表情で雄二を見ていた。おそらく、姫路が雄二に好意を寄せているとでも思っているんだろう、この鈍感(バカ)め。

「さて、明久。帰るぞ。」

「あ、うん。雄二、姫路さんとはもういいの？」

「ああ、これで決心しただろうし・・・・・・」

「前より一層、な？」

そういうと、姫路はボンっという音がしっくりくるような感じで顔を真っ赤に染め上げた。初心だねぇ。

「ふーん。よくわからないけど・・・・・それじゃ、姫路さん。ま

たね！！」

「あっ、はい！さようなら！！」

こうして、俺たちは教室を後にしたのだが・・・

『捲っちゃって・・・・・いいんじゃないかな？』

明久天使出てくるのおせぇ！！！！！しかもスカート捲り肯定かよ！！！！！！！！！！

こうして、俺たちは、学校を後にした・・・・・

第１１話～俺とバカと戦後会談～（後書き）

ちょっと、中途半端に切ってしまいました。週末にまた投稿するかも・・・・？

感想、その他お待ちしてま～す。
※罵倒だけの感想はお控えください

第１２話～俺と明久と教室の出来事～

あの後、俺たちは学校からの帰り道の途中で話をしていた・・・・・・ちなみに、俺は明久の住むマンションの隣のマンションに住んでいる。雄二は家が近いから、最近はもっぱらこの三人で帰る。

「それにしてもさぁ」

「ん？」

「Ｄクラス戦って必要だったの？エアコンぐらい、他の方法でも壊せたと思うんだけど・・・・」

やっぱり明久だな、少しは頭を使え。

「バカだな、明久。理由はいろいろある。皆を戦争に慣れさせたり、自信を付けさせたりするためだ。他にもあるがな。」

流石雄二。明久を罵倒することを忘れない。

「じゃあ、Ｄクラスとの設備交換をしなかったのは何で？」

この問いには俺が答える。

「Ｄクラスの設備で満足する奴らが出るからだ。決戦の前に統率が乱れたら、勝てるもんも勝てなくなるだろ？だからＦクラスの設備のままで、不満によるモチベーション維持を行うんだ。」

「へぇ～いろいろ考えてるんだね。」

「「お前が考えなさすぎなんだ（アホゥ／アホが）！！」」

これぱっかりは譲れない。明久は本当に何を考えながら生きてるんだろうか？一度解剖してあの頭の中をのぞいてみたいぜ。

「・・・・・・・Aクラスに勝てるかな？」

・・・逃げやがった。まあ、この問いも本心からみたいだし、追及は無しにしてやろう。

「勝てるさ、俺を誰だと思っている。」

「・・・元神童で、今は人を人とも思わぬ超暴君。中学時代は荒れに荒れて悪鬼羅刹の異名をとった、痛い奴。そして、ここ。文月学園で何者かに理由はわからないが狙われている奴・・・・ってとこかな？」

「おい、守・・・調子のってんのか？ん？暴君って誰がだ！それになぁ・・・・・・・・・・悪鬼羅刹のことは言うなぁぁぁぁ！！！！」

結構気にしてたらしい。

「それと・・・・・・・何で誰かに狙われてるってわかった？（ボソッ）」

「どうせ女だろ？お前と姫路がさっき接近した時、スッゲエ殺気を

感じたぜ？（ボソボソ）」

・・・・・・・・・・・・ｏｒｚ状態になる雄二。

「でも、ありがとう雄二。僕のために・・・」

「気にするな、それに俺のこの学園に来た目的とかぶってるしな。」

「目的？」

俺は首をひねる。最初はあんまり乗り気じゃなかったから、戦争が目的ではないだろう。だったら何だ？

そんな俺の疑問を感じ取ったのか、明久が説明し始めた。

「雄二の目的はね・・・・・『勉強だけが全てじゃない』ってことなんだ。だから、点数でおとるＦクラスでＡクラスに勝つことが、その証明になるからだと思うよ。」

それを気いた俺にかつてない衝撃が走る！！！

「・・・・・・そんな・・・・・・・」

「ど、どうしたの？守？今の話にそんなショックを受けるようなところは・・・・・」

「・・・・・・明久が・・・・まともに考え、なお且つ考察をのべるだと・・・・・・・・！？」

「またぁぁ！！？守はどれだけ僕をバカにすれば気が済むのさ！！」

「「一生じゃないかな？」」

「雄二も！？畜生！二人なんてキライだぁぁぁぁぁ！！！」

明久はそういいながら走って行ってしまった。・・・ちょっとやりすぎたか？

そう思っていると、明久が帰ってきた。何がしたいんだ？コイツ。

「学校に教科書忘れてた。」

アホか。・・・・・・って

「あ、俺もだ。」

「お前ら何やってるんだ・・・・・・俺は帰るぞ。」

「うん、じゃあね雄二。」

と明久。

「ああ、また明日な雄二。」
と、俺。

こうして、俺と明久はまた学校に舞い戻ってきたわけだが・・・・・・・・・・

今の状況を説明しよう。

俺、明久が教室に入る。

←

姫路がなぜか残っていた。

←

姫路の手元にあった紙がこちらへ。一文目に『あなたのことが好きです。』の文字

こんな感じだ・・・・・・・・・・

おそらく、明久へのラブレターでも書いてたんだろう。

とうの明久はと言えば・・・・・

放心状態。・・・・お？またあの悪魔が出てきた。何で俺にだけ見える？

（都合上、見えたほうが楽に進むからさ☆ｂｙ作者）

・・・・・何だ？今何か受信したような・・・？まあ、いいか。それよりも悪魔だ。

『現実を見ろ、明らかにラブレターだ。』

「こ、これはですね、そのっ！！」

姫路はテンパってるな。まあ、想い人に向けて書いてたラブレターをその想い人に見つかったからしょがない、か。

「うん、わかってるよ。」

なんだと！！？あの鈍感で馬鹿な明久が姫路の想いに気づいてるだと！？

姫路が書いていたラブレター（二枚目）が飛んでくる。そこには

『付き合ってください。』

の文字。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（明久）」

『わかったろう？これが現実さ。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『さあ、諦めて認めようぜ？』

そうだな、さっさと好意に気づけ、バカが。

そう思いながら、明久を見ると、にっこりと笑いながら、姫路に手紙を返し、一言。

「変わった不幸の手紙だね。」

「『こいつ認めない気だ！！！』」

俺と悪魔、渾身のツッコミだった。

「そ、それはとても困る勘違いと言いますか・・・・・」

「こんなことしなくても、僕やＦＦＦの皆が殺ってくれるのに・・・・・ああ、大丈夫。スタンガンは隣の山本君に借りるし、ムッツリーニや須川君なら刃物も持ってるだろうから・・・・・」

明久、やるの字が違うし、刃物を常備している学生はとてつもなく以上だと思うんだ。俺。

「い、いえ、これは不幸の手紙じゃあ・・・」

「嘘だ！！現に僕はとてつもなく不幸な気分だ！！」

そう言って、駄々をこねるように騒ぐ明久。黙らせるか（スウ・・・）そう思い、手刀を構えたが、姫路が明久を抑えてくれた。

「・・・・・・仕方ない・・・・・・・現実を認めよう・・・・・相手はやっぱりうちのクラス・・？」

「・・・はい。」

「でも、そいつのどこがいいの？外見はそれなりだとは思うけど・・・・」

あいつは結局姫路は雄二のことが好きって勘違いしてんのか・・・・・

まったく。

「あ、いえ。外見じゃなくて・・・、あっ、もちろん外見も好きですよ！？」

「いいなぁ、僕外見に自信がないから。」

「そんなことないですよ！私の友達も結構『たくましい坂本くんと、美少年の吉井くんっていいよね』って！」

「いい友達だね。」

これは、明久にも春か？

「あ、『やっぱり、吉井くんが受けかな？』ともいってました。」

・・・・腐ってたか・・・・・・・ドンマイ、明久

「その友達とは距離をおこう。っていうか誰！？」

「優子ちゃんです。」

しらないなぁ。

「まあ、いいや。じゃあ、外見じゃなかったら、そいつの中身がい

いってこと？」

「えーっと、はい。」

「確かに、臓器とか頑丈で高く売れそうだもんね。」

明久、それは中身違いだ。

「ありえないけど、そいつの性格が？」

「ありえなくありません！！」

姫路にしては珍しく、大きな声だ。それだけ譲れないことなんだろう。

「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで・・・・・私の憧れです。」

「そっか・・・・・その手紙・・・・いい返事が貰えるといいね。」

「は、はい！」

この時の嬉しそうな姫路はとても魅力的だった。

・・・・なぜか、ムッツリーニが現れて、写真を撮りまくってたが・・・・

「・・・これは売れる。」

「ムッツリーニ。一ダースもらうよ。」

「・・・・・一枚２００円」

お前ら・・・・何やってんだ・・・・

第１２話～俺と明久と教室の出来事～（後書き）

どうでしたでしょうか。

この話以降、来週からは金曜から日曜の週末に投稿しようと思います。

以上です。

感想など、お待ちしてまーす

第１３話～俺と代表とＣクラス～

戦争の翌日。俺たちはいつも通り学校におもむいた。

・・・・・・のだが。

「今日は全員補充試験かよ。俺やることないじゃねえか。」

そう、そうなのである。俺こと岡田智樹は昨日の戦争中戦争に直接参加せず、嫉妬により暴徒と化したＦクラスの面々を相手取っていたが、すでに手負いの状態だったため、無傷だった。

仕方ない・・・・・

「んじゃ、屋上でのんびり『何をするんですか？岡田君』・・・・・できない見たいっすねェ・・・・何でこんなところにいるんですか？高橋先生。」

いつの間にか、俺の後ろに高橋先生が・・・・気配を全く感じなかったぞ・・・・・・鉄人・・・あの肉体は素晴らしい！！！何が素晴らしいって・・・ゲフンゲフン！！じゃなかった。鉄人も戦死者がいるとどこからともなく現れるし・・・・・・・・ええい！文月学園の教師は化け物か！！！！

「はい。岡田君は今日の補充テストを受けないと福原先生に聞いたので。」

「それで？」

「岡田君の学力的にも今日はCクラスに行って授業を受けてもらいます。やはり、実力の近い人が多いほうがいいでしょうから。」

「・・・・・・はい？」

「ですから・・・「いや、わかりました。」・・・そうですか。」

なぜかちょっと残念そうな顔をする高橋先生。

「でも、Cクラスか・・・・・・はぁ～ダリィ。」

何がだるいって、ここの校風に変な風に毒された奴が結構いるから何だよな・・・・・・こう、『下のクラスってことは俺よりバカだろ？ハッ』みたいなやつがこういう実力主義になると必ずいるんだよな。そういうやつは嫌いだ。まったく、自分よりも上がいるってことを忘れんなよ。それにCの代表がそんなすごい奴って噂も聞かないし。

「では、ついてきてください。念のため教室まで付き添います。」

そんな俺の心中を知らず、いつも通りに話しかけてくる高橋先生。いやま、先生は悪くないからいいんだけどな。

「う～い。」

そんな気合の入らない返事をしながら高橋先生についていく。・・・・Fクラスの面々は全く気にせず騒いでたがな。・・・・主に明久が島田に蹴られたり、殴られたり、絞められたり、固められたり・・・・・・・・・・うん。いつも通りだ。

そして、Cクラス前。俺は担任の佐藤一郎先生と共に立っていた。・・・え？高橋先生なら俺を佐藤先生に引き渡して自分の教室行ったぜ？

「岡田君？今日一日だけと言っても、同じ文月学園の二年生だ。しっかり、交流を深めなさい。」

「は～い。」

うん。名前もさることながら、言うことも全く持って普通だな。やっぱCクラスって普通だからか？

「さて、皆。ホームルームでの連絡事項はない。が、皆もFクラスの試召戦争は知ってるな？そのFクラスが今日は補充試験なんだが、受けなくてもいい子が一人いてな。今日は一日このクラスで共に学んでもらう。入ってきて。」

「はい。というわけで紹介を受けました。岡田智樹です。今日一日よろしくお願いします。」

え？キャラが違う？バカ野郎！俺の去年のキャラはこっちなんだよ

！目立たないように・・・・・は無理かもしんないけど、できるだけ普通でいたいんだよ。最近毒され始めてる気もするが・・・・・

そうやって、無難にやり過ごそうと思っていた俺の耳にあるセリフが聞こえてきた。

「何だ、Ｆクラスの馬鹿じゃない。そんな奴がＣクラスなんかにきてついてこれるの？まったく、どうせ馬鹿なんだから、同じ馬鹿どうしＥとかにでも行ってなさいよ。」

それは、俺がもっとも嫌いな言葉の一つ。そして俺は・・・・・・・・・我慢できなかった。

「はぁ～面倒事は嫌いなんだがな・・・・・・・・おい。」

突然俺の雰囲気が変わったため、呆然とするＣクラスの面々。当然か。さっきまでニコニコしてたやつがいきなり乱暴な口調で態度も変わったからな。

「な、何よ。」

「一応聞こう。もしかして、お前がこのクラスの代表か？」

「そうよ！何か文句でも？」

道理でな、さっきから男子が気の毒そうな表情でこちらを見てはいるが発言する様子は無い。このクラスでの男子の発言力は弱いんだろう。即ち代表が女。そしてこいつは取り巻きもつれてるしそれっぽかった。

「お前の名前は？」

「小山友香(こやまゆうか)よ」

「そうか・・・・小山、何でＦクラスをバカにする？」

「そんなの当り前じゃない。授業は真面目に受けない。そのせいでテストの点数は悲惨。いつもバカばっかりやってて、学校の恥さらしだわ。」

「そうか・・・・確かにそうだろうな・・・・」

「そうでしょう！だかｒ「だがな！」・・・！？」

「それがお前らがあいつらを侮辱していい理由にはならねえんだよ！！」

「「「「「！！」」」」」

「確かに、あいつらの態度や成績は悪いかもしれない。でもな、あいつらはいつも真っ直ぐだ！自分たちがやりたいことを思いっきりする。仲間と楽しもうってな。お前らみたいに中途半端にいい成績を手に入れて、自分がしたいことを押さえつけて。挙句の果てには自分たちは優秀だと思い込んで自分より下だからと言って他者を差別する。そんな歪んだお前らよりもＦクラスの奴らのほうがよっぽど人として優秀だ！！！！」

「な、なんですって！」

「特に小山。お前だ。お前がクラス代表なのは点数が一番高いから

だろう？それでもせいぜい一位と二位の差は大きくても数十点だろう。お前はたかが数十点他の奴より点が高いだけで他の奴らに偉そうに命令か？代表ならクラスの奴らと話し合って、Ｃクラスをより良いクラスにするのが仕事だろうが！！ふんぞり返ることだけなら誰だってできんだよ！！」

「で、でも！恭二だって代表なんてこんなもんだって・・・・！」

「恭二・・・？ああ、根本か。お前、男の趣味悪いなぁ。」

「うるさいわね！私は賢い男が好きなのよ！！」

「あいつが賢い？・・・・・・・プっ、アハハハハハハハハハハ・・・・・・・！！！！」

「何よ！なんか文句でもあるって言うの！？」

「おいおい、あんなカンニングは当たり前、卑怯な手を臆面もなく使うあいつが賢い！？冗談もほどほどにしてくれよ。プフッ・・・」

「生きていくうえで、多少ずる賢いほうがいいじゃない。」

「確かに、そういった賢さは多少は必要だろうがな・・・・あいつのやり方じゃ、社会じゃ通用しねえよ。あいつは大っぴらすぎる。本当にそういったことをしたいのなら極力そういった噂が立たないようにするのが常識だ。そんなこともできねえ奴が賢いなんて、笑わせるな。」

「大層な口をきくわね。あなた、何がわかるっていうの！」

「事実だからしょうがない。それにいつかあいつは負けるさ。・・・・・格下相手にな。」

「何ですって！？それってどういう『席について下さい。授業を始めます。』・・・くっ」

アブねー、普通に俺たちが次にBクラス攻めるぜみたいなこと言っちまったけど、あいつ頭に血が上ってうまく理解してないな。良かったよかった。

さて、それじゃ頑張りますかね。

こうして、俺にCクラスでの授業は進んでいった。

・・・・・・・・・・・・・・・常に背中に睨むような視線を感じたのは気のせいだろうな。うん。きっとそうだ。

～ｓｉｄｅ小山～

今日、Ｆクラスから岡田智樹とかいう男子が来た。何でもこいつだけ昨日のＤクラス戦で無傷だったとか。

けど、入ってきて挨拶をした瞬間興味が失せた。だって、いかにもずっと後ろにいましたみたいな雰囲気だったもの。そしてその失望感からついつい言葉が出てしまった。

「何だ、Ｆクラスの馬鹿じゃない。（中略）・・・馬鹿どうしＥクラスにでも行ってなさいよ。」

そう言ったら、あいつは何かブツブツとつぶやいた後・・・・・・・・・・突然雰囲気が変わった。

びっくりしたわ。だっていかにもなよっとした雰囲気だったのがいきなりそこらの不良みたいな雰囲気になるんだもの。

その後あいつは私たちを歪んでいるといった。『自分を殺してちょっと立場を手に入れただけでふんぞり返るのはおかしい。』・・・確かそんな内容だったはず。

あ、あのときはちょっとカッとしてたからうろ覚えなの！！ちょっとぐらいいいじゃない！！

それと恭二（きょうじ）のことも馬鹿にされたけど・・・・・・・・・・・・正直恭二に関してはその通りだと思った。そんなことも考えられなかったなんて、あの時はどうかしてたわ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・そろそろ、あいつとも潮時かしら・・・・・

そうそう、後談だけど、吉田やほかのFクラスの馬鹿男子が数人保健室送りになったって聞いたわ。

・・・・あいつは大丈夫かしら・・・・・・・・・・・・って何で私があんな奴の心配しないといけないのよ！そうよ！いい気味だわ！！

で、でもまあ一日とはいえ一緒に勉強した仲だし、不自然なことは全くないわよね。そうよ！ただ今日一緒に勉強した奴だから心配し

てるだけよ！！

・・・・・・うう、考えがまとまらない。それもこれも全部あいつのせいよ！今度会ったら文句言ってやるんだから！！！

第１３話～俺と代表とＣクラス～（後書き）

これからは金曜から土曜にかけて投稿しようと思います。

あ、あと試験期間が近づいたので、また更新が空きます。

申し訳ありません。ｍ（＿＿）ｍ

第１４話～俺と屋上とべんとう（？）と1～（前書き）

やっと試験終わりました。

ではどうぞ～

第１４話～俺と屋上とべんとう（？）と1～

俺はＣクラスでの勉強を終えて（昼まででいったん休憩らしい）Ｆクラスに帰ってきていた。

「あ～めんどかった～」

「災難だったな。守。」

そう苦笑いしながらなぐさめてくれたのは我らが代表こと雄二。

「ほんとだぜ、いきなりＣクラスの代表に目ぇつけられたしよ。あ、そうそう。その代表だが、小山って言って『あの』根本の彼女らしい。まあ、ゾッコンって感じではなかったがな。むしろ根本があいつにゾッコンだろう。」

そう言った途端、雄二の顔が警戒したものに変わった。そりゃそうだ。なんせ次攻めるのはその根元が代表のＢクラスなんだからな。

「そうか、なら何かしらアクションがあるかもしれんな・・・注意しておこう。」

俺たちがそんなことを話していると

「うあーーーづがれた～・・・ん？何の話をしてるの二人とも？」

明久が来た。相変わらず平和ボケした面してんなぁ

「ホントにのぅ。今回は疲れたぞい。」

「・・・・・・・・・（コクコク）」
秀吉とムッツリーニもついてきたか。まあ、腹も減ったし・・・
「飯食いに行くか。」
「「「ああ。（うん。／うむ。）」」」
え？一人足りない？ムッツリーニは首肯して、声は出してないからだ。問題ない。
「腹も減ったし、今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっか。」
どんな身体構造をしてるんだこいつは・・・・・・
そうして、食堂に向かおうとすると、また新しい面が顔を出した。
「あれ？あんたたちも食堂？だったら一緒に行きましょうよ。」
「・・・・・・・・（コクコク！）」
うなずくムッツリーニ。
「別にかまわないぞ。」
と雄二。
それにしてもムッツリーニの反応は早かったな。島田に色気を求め

るのはちょっと・・・・・・・・・な・・・・・・・・無駄のような気もするんだが。正直秀吉のほうが断然色気があｒ「吉井、吉田。なんか急にあんた達を殴らなきゃいけないような気がしたんだけど。」

「「滅相もございません！」」

おお、明久よ、気が合うな。というか、凄まじい勘の良さだな。野生のちかｒ「吉田？」・・・・・考えるのはよしておこう。

「ま、まあともかく食堂に行こうぜ。」

「そうだね！今日は僕も贅沢にソルトウォーター辺りを・・・・・」

ソルトウォーターって塩水じゃねえか！！雄二も大概だが、明久もどういう体してんだ？普通の人間なら栄養失調でとっくに死んでてもおかしくないぞ。ふふ、やはり興味深いな・・・・・・・

今度こそ食堂に向かい・・・「あ、あの皆さん。」・・・・今日はついて無いのかな、俺。食堂に向かおうとするたびに邪魔が入るんだが。

振り返るとそこにいたのは姫路だった。しかも大きなバスケット（？）みたいなものを提げている。もじもじしながら言い出した。

「あ、あの・・・ですね。昨日の約束だったお弁当を作ってきたんですけど・・・・・・」

「本当！！？」

明久の食いつきが異常だな。ていうかいつの間にそんな約束を？

「め、迷惑じゃなかったら・・・・・」

「迷惑なわけないじゃないか！！ねえ！雄二、守。」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

しかし、姫路の気持ちを知っているから俺からしたら、二人きりにしてやったほうがいいような気もするが・・・・・・

「俺たちもいいのか？」

「はい！そう思ってたくさん用意してますから。」

・・・・まあいいか。

「そうか。じゃ、ありがとな、姫路。」

「わしもご相伴にあずかろうかの。」

「・・・・・・・・・（コクコク！！）」

秀吉とムッツリーニも来るようだ。結局いつものメンバーだな。

しかし島田だけは・・・

「む～っ、瑞希って案外積極的なのね・・・・・」

恋敵だしな。

「それじゃあ、せっかくじゃし屋上にでも行こうかの。」

「あ、それいいな。そうしよう。」

「じゃあ、お前ら先に行っとけ。俺はジュースでも買ってくる。昨日頑張ってくれたことだしな。」

「あ、じゃあウチも手伝うわ。」

おお、島田も家庭的なところを明久にアピールということか。涙ぐましいな。

・・・ただ、その本人は『奇怪な！』みたいな顔してるけどな。ドンマイ、島田。

さて、俺たちは先に行って待つとしようかね。

「それじゃ、俺たちは先に行ってるぞ。あまり遅くなるなよ。」

「そうそう。遅かったら僕たちが食べ終わってるかもよ？」

「それじゃあ、少し急ぐか。おい島田、行こう。」

「ええ、そうね。」

そう言って財布を片手に雄二と島田は教室を出て行った。きっと売店に向かったんだろう。あそこにしか自販機は無いからな。

「それじゃ、僕らも行こうか。」

「ええ、そうですね。」

「うむ。」

「そうだな。」

俺たちも教室を出る。その際姫路の弁当を見たら、なるほど。こりゃ全員で食ってもなかなか量がありそうだっていうぐらい大きな弁当箱だった。おそらく明久の極度の栄養不足を心配してのことだろう。・・・・・いい子だ。

「姫路さん、重そうだね。僕が持つよ。」

お、いいぞ明久。そういう気遣いできるのはいいことだ。姫路も好きな相手に気を使われるのはまんざらでもないだろう。

「ふむ、そうじゃな。どれわしも持とうかの。」

・・・・・・・・・・・・・何を・・・・・・

「「何を言ってるんだ!!秀吉!!」」

おお、やはり明久も同じ気持ちか!よくわかってるじゃないか。

「守、明久。どうかしたのじゃ？いきなり」

秀吉はわかってないみたいだ。まったく・・・・・・

「いいか秀吉?お前はわかってない。」

「む？わかってないとはなんのことじゃ？」

ほんとにわからないのか・・・・・・・・・ハァ・・・・・・・

「な、なんじゃ！その『何でこいつ分かってねえんだよ』的な目線は！！」

「いいか秀吉、よく聞け・・・・・・・・・・・・・

俺の真剣な顔に感化されたのか、秀吉だけでなく、姫路まで真面目な顔になっている。・・・・・・・・・・・っていうか明久よ、今気づいたけど、お前が真剣な顔をしてるとぶっちゃけキモイｗ

まあいい、俺は気を取り直して、俺たちの、いや文月学園中の男子を代弁して高らかに宣言する！！

・・・・・・・・・・・・美少女に荷物を持たせるわけにはいかないだろうがーーーーーー！！！！」

「儂は男じゃーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

この日、文月学園中に俺たちの叫び声が響いたとか響いて無いとか・・・・・・・

そうこうしながら屋上に着いた俺たち。屋上の天気は綺麗に晴れていて、抜けるような青空が見え、少しだけ風も吹いている。最高の天気だな。

「天気が良くて何よりじゃな。」

「そうですねー」

そんな会話をしている秀吉と姫路を風がそっと撫で、その髪を揺らしている。うん。やっぱり、美少女だね！二人とも。

「む、今何か嫌な感じが・・・・・・・主にまた女子じゃと誤解されたような気配が・・・」

何を言ってるんだろうな、秀吉は。秀吉は女子に、しかもとびっきり可愛い美少女に決まっているじゃないか！！」

そんなことを思っていると、秀吉がジト目でこちらを見ていた。なぜだ？解せぬ・・・・・」

「さっきからちょこちょこ漏れておるぞ、守。」

「・・・・・・・・・マジで？」

「・・・・・・・（コクリ）」

明久に確認を取ると、どうやらホントらしい・・・・・・・

ガーーーーーーン！！！！秀吉に嫌われるなんて・・・・・・・・
鬱だ、死のうｏｒｚ

「ふふ、そうだよな、こんな奴に可愛いとか言われても嫌なだけだよな・・・・・・・・・すまなかったな、秀吉。俺みたいな奴なんて裏切られて、借金作って、黒服のお兄さんに連れてかれて、人知れず死んでいけばいいのさ・・・・・アハハハハハ・・・・・・・」

「ど、どうしたの？守。」

「明久か・・・・・・・・こんなミジンコよりも使えないクズなんかを気にしなくていいんだよ・・・・アハハハハ・・・・・・」

「重症だーーーーーーー！！！！！！！」

明久が何か叫んでるけどどうでもいいや。フゥ・・・・・・・

「ま、守よ。わしは別に怒っとるわけではないぞ。ただ、ちょっと恥ずかしかっただけじゃ。じゃから気にせんでもよいぞ。」

「俺！復☆活！！！」

「早っ！！復活までが早すぎるよ守！！」

「あ？どうした明久？もともと悪い頭がさらに悪くなったか？」

「くっ、友達が立ち直ったのはいいこと、いいことのはずなのに・・・・ッ」

明久は何をブツブツ言ってるんだ？ついに・・・・・・終わったか？（主に頭が）

「あの～皆さん？」

騒いでいた俺たちに遠慮しながら、姫路が声をかけてきた。そうそう、もとは姫路の作ってきた弁当をもらうんだった。

「ああ、悪い悪い、準備手伝うよ。」

「いえ、もう終わっているので。」

姫路の指した先には広げられたブルーシート、既に蓋が取り除かれている弁当、そして・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・ぶっ倒れて小刻みに震えているムッツリーニ。

「「「何でだ（じゃ）！！！！！」」」

すぐさまムッツリーニに駆け寄って、症状を見る。自慢じゃないが基本的な検診はできる。むっ、これは・・・・・・・毒の症状だ！しかも今まで見たことがないような・・・・・・新種か！！？でもこの状況でどこから・・・・・・・・・ハッ、まさか・・・・・

必然的に俺の視線がある一点に向かう・・・・・・・・そう、姫路の作った弁当に・・・・

「ムッツリーニどうしたのじゃ！いきなり倒れるなど！！」

俺が冷や汗を流している間に明久と秀吉もこっちに向かってきた。俺が二人に忠告しようとしたその時・・・・

「・・・・・・・（ムクリ）」

「ムッツリーニ！！？」

バカな！！あんな状態じゃあ、立つのさえおぼつかないはずなのに・・・・・・・

驚愕している俺の前でムッツリーニは

「・・・・・・（グッ）」

姫路に向けて親指を立てる。おそらく『とても美味しい』と伝えたいのだろう。バカ野郎ッ！立つだけでも精一杯だってのに、姫路を気遣うなんて、お前は立派な（変態という名の）紳士だ！・・・・・・・・・え？こんな時でも批判かって？だってそりゃ、事実だし。

「あ、お口にあいましたか？良かったです。」

ムッツリーニの言いたいことが伝わったのか、喜ぶ姫路。（殺人未遂容疑者：職業：必殺料理人）

でもな、ムッツリーニ、今もなお足を震わせながら言っても、説得力に欠けるぞ。見ろ、明久も秀吉も『うわぁ・・・・』って顔してるだろうが。

「良かったらどんどん食べてくださいね。」

姫路が笑顔ですすめてくる。本人に悪意と自覚がないのがまた何とも・・・・・・・

（明久、秀吉あれ、どう思う？）

姫路に聞こえないように緊急会議を開始。もちろん表面上は正面を

向いて笑っているが。これはFクラスに入って取得した技術だ。教師の目から逃れるのに使える。Fクラスは技術の使い方を大きく間違っているような気がする・・・・・・

（どう考えても演技には、見えんぞい）

（ああ、俺がさっき診たとき、毒を服用した際の症状と似ていた。）

（マジで！？超ヤバいよね？）

（明久、おぬし体は頑丈か？）

（食事回数が少なすぎて退化してるから、胃は弱いよ。）

むしろ、そこまでの低燃費性を実現したのは進化だと思うが・・・・

（俺も、体は普通より少し頑丈ぐらいで、自信は・・・・・・）

（ふむ・・・・・ならばわしが行こう。）

（そんな！！秀吉をそんな危ない目にあわすわけには・・・・！！）

（安心せい。わしの胃は存外タフでの、ジャガイモの芽くらいならびくともせんのじゃ。）

それは凄いな・・・・・・あれ毒だろ？

（でも・・・・）

（安心せい、わしの鉄の胃袋を信じて――――――）

秀吉が外見に似合わない、男らしい台詞を言おうとしたその時、俺たちの前に

『アイツ』

が現れた・・・・・・

第１４話～俺と屋上とべんとう（？）と１～（後書き）

どうでしたでしょうか、感想、アドバイスお待ちしています。

・・・・・・・・・物理なんて消滅すればいい・・・・

というより、１４話使ってまだ１巻の半分ｗｗｗ

このペースだと、小山や優子、高橋先生を絡ませるのにどれぐらいかかるんだろうか・・・・作者にもわかりません。

第１５話～俺と屋上とべんとう（？）と２～（前書き）

もうそろそろ、冬休みです！！

休みの間は、正月など除いては更新ペースを速めたいですね～

では、どうぞ～

第15話～俺と屋上とべんとう（？）と2～

絶望の淵にいた俺たちの前に『アイツ』は現れた・・・

振り絞ってこちらを見たやつの眼は、雄二の言いたいこと雄弁にを訴えていた。

『毒を・・・・・盛ったな』と。

『盛ってなんかねえよ、正真正銘、製作者の実力だ。』

俺も眼で語って返す。前回のひそひそ話の時と同じように、Ｆクラスの入って身に付けたが、これまた使える技術だ。気心が知れたやつらじゃないと使えないってのがネックだが。

「あ、足が・・・・・・・・攣って・・・・・・な・・・・・」

姫路を傷つけないように、嘘をつく雄二。あれだな、こんな時だからよくわかるけど、雄二って普段は悪ぶってるけどホント友達思いのいい奴だよな。

「あはは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな？」

「うむ、そうじゃのう。」

「そう？坂本ってすごい鍛えられてるから、そんなのない気がするんだけど・・・・」

事情を知らない島田は不思議そうな顔をしている。

トレーナーを志すものとして、嘘の知識を教えるのには抵抗がある・・・・・・でもこのままでは、俺もあの弁当の餌食か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・うん。時には嘘も必要だよね！！自分まだ死にたくねっす。

「島田、たとえ鍛えられているといっても急に運動をすれば攣る確率は高くなるんだ。お前も気を付けろよ。」

「そうなんだ・・・・・・」

止めて！そこで『へぇ～』みたいな顔しないで！！スッゲエ罪悪感湧くから。

「そうだよ、島田さんも良く胸とかが攣るからわかｒ――――ブベラッ！！！」

「本当、に！吉井は！ウチを！怒らせるのが！上手なんだからぁッ！！！！！」

「オフッ、ゲフッ、ゴフッ、ガフッ、アベシッ！！！！！」

右ジャブ、左ジャブ、右フックを顔面に、左を鳩尾に叩き込み、昇竜拳バリのアッパーで顎をかちあげる。見事なとしか言えない、格闘家も真っ青の五連コンボ

哀れ、叩き込まれた明久は宙を舞い、背中から墜落。

「グヘエッ！！」

「フン！！」

「島田、今のは明久が悪いからあのバカはどうでもいいが、拳が返

り血まみれだぞ？手ぇ洗ってきたほうがいいんじゃないか？」

「あ、ほんとだわ。じゃあ洗ってくる。全く、吉井のせいで・・・・」

ブツブツ言いながら席を立つ島田。よし、過程はどうあれ、これでリスクは軽減された。

「島田はなかなか食事にありつけておらんのう。」

「まったくだな。」

秀吉と共に朗らかに笑いあう。その笑顔の裏では、こんな会話が繰り広げられていた。

（明久！次はお前が行け！！）

（お、雄二。復活したのか、さすがだな。）

（って、僕ぅ！？む、無理だよ。さっきの島田さんのダメージもまだ残ってるのに、あんなの食べたらきっと死んじゃうよ！？）

（さすがの儂も、雄二ですらダメじゃとなると、決意が鈍る・・・）

（雄二が行きなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはず・・・・・・ックウ・・・）

いや、明久。辛いなら言うなよ、しかもまだ勘違いしたままだし・・・

（いや、どっちかというと姫路が食べてもらいたいのは明久じゃと思うぞ？）

（そんなことないよ！秀吉、女の子なのに乙女心が分かってないね！！）

（む、すまん・・・・・ってわしは女の子ではないのじゃから、わからんでもよいわーーー！！！）

（うむ、それにわかってないのはお前のほうだと――――――――）

（ええい！往生際の悪い！！）

「あっ！姫路さん。あれは何だ！？」

「えっ？何ですか？」

明久の指した明後日の方向を見る姫路。純粋すぎだろう。将来が心配だ。

（おらあぁぁぁッ！！）

（もごぁぁっ！！？）

お！姫路が他所を向いている間に雄二の口に姫路の弁当（さいしゅうへいき）をブチ込んだ！！明久、吐きだせないように顎を捕まえて強制的に咀嚼！！雄二なすすべもなく飲み込んだーーーーー！！

「ふぅ。これで良し。」

「お主、存外鬼畜じゃな・・・・」

「雄二・・・・・・お前の勇姿は忘れない・・・・・。」

「お主も平然と受け止めすぎじゃ！」

秀吉が何か言ってるけど気にしない。

雄二がヤバいんじゃないかってぐらい震え始めてるけど気にしない。

何でかって？

命の危機を回避できたからに決まってるじゃないか。必然的に緩むってもんだ。

「ゴメン、見間違えだったよ。」

「あ、そうだったんですか。」

「お弁当おいしかったよ、ごちそう様。」

「うむ、大変良い腕じゃ。」

「そうだな、これならいつ嫁さんに行っても大丈夫だろう。」

雄二の犠牲で、弁当の始末は完了。ああ、人間ってここまで開放的な気分になれるんだなぁ・・・

「あれ？早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に雄二が『うまいうまい』ってすごい勢いで。」

「そうですか～嬉しいです。」

眼の端で雄二がフルフルと首を横に振っているのが見えたが・・・・・・・・・・・・・・・・無視の方向で。

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

まだ意識は保っているはずだ。せめて昼の終わりまでは保ってもらわないと処置はできん。

「う・・・・・うぅ・・・・・・・あ、ありが・・・とな・・・・・姫路・・・・・・」

ヤバいな、もう眼が虚ろだ。

「そういえば、駅前に新しく喫茶店ができておいしいって噂だな。」

ここで話題はそらしておくのが吉だろう。『それじゃあ、また作ってきます。』なんてことにもならないように。

「ああ、あの店じゃな。確かに評判は良いの。」

「え？そんなお店があるんですか？」

「うん。今度今日のお礼に雄二がご馳走してくれるって。」

「てめ、勝手なこと言うなってのの。」

雄二、もう喋れるまで回復したのか、ほんとスゲエな、お前の体。見ろ、ムッツリーニなんかさっき力尽きてピクリとも動いて無いのに。

そのまま、雑談が続き、目論見が成功したと思ったその時。

「あ、そうでした。」

ポン、と手を打つ姫路。そして、カバンをごそごそと漁って・・・・・・！？

「実はですね～デザートもあるんですよ。」

「ああっ！！姫路さん、あれはなんだ！？」

「待て明久！次は俺でもきっと死ぬ。」

（お前、俺を殺す気か！？）

（こんな危険な任務は雄二にしかできない！任せたぜっ！（キリ））

（ああ、雄二。お前の勇姿は忘れない。（キリ））

（そんないい笑顔で言われてもできんものはできん！！）

（この意気地なしがっ！）

（そこまで言うなら明久、てめえに食わせてやるよ。）

（な、何で構えるのさ！！？）

（てめえを殴って抵抗できなくしてから腹いっぱいに詰め込んでやる。歯ぁ食いしばれぇっ！！）

（いやーーー！！殺されるーーーー！！！）

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・わしが行こう。）

（（秀吉！？））

（無茶だ、死んじゃうよ！！）

（そうだ、お前にそんな重荷を課すわけにはいかない！！）

（お前ら俺のことは率先して犠牲にしようとしたよな！？）

そりゃ、美少女の秀吉とそこらの男子である雄二なら、世界的な損失になるのは秀吉に決まってるだろう。

（大丈夫じゃ。ワシの胃袋は強靭じゃしの。せいぜい消化不良程度じゃろうて。）

確かに、ジャガイモの芽を無効化できる胃袋なら大丈夫かもしれんが、それでもっ！！

秀吉を傷つけるわけにはいかない！！

「どうかしましたか？」

「「「「大丈夫だ（じゃ）、問題ない。」」」」

やっぱこういう時は、このセリフだよね！

「あ、もしかして・・・・・・・」

顔を曇らせる姫路。もしかして、バレたか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れてきちゃいました。」

言われてみれば、容器だけだ。さすがに箸で食べるわけにもいかないからな。

「すぐ取ってきますねっ。」

そう言って階下へと姿を消す姫路。

「さて、ではこの間にいただくとするかの。」

「・・・・・すまん。恩にきｒ「待て、秀吉。」・・・守？」

「何じゃ？守よ。」

「俺から一つお願いがある。成功すれば、秀吉はそれを食べなくて済む。試させちゃあくれねぇか。もちろん、失敗したらその時はも

う止めねえ。」

「・・・・・わかったのじゃ。してその策とは？」

「それはな・・・・・・・・・（ボソボソ）」

「ッ！そんなことで本当に大丈夫なんじゃろうか？」

「俺を信じろ。秀吉。そいつも、まんざらではない。とか絶対言うから。」

「むう、わかったのじゃ。」

そういうと、俺の指示通り、髪をポニーテールにまとめる秀吉。

くくくっ、予想通り明久が食いついてやがる。あいつがポニテ好きなのはもう調べがついてんだよ！

「（パシャパシャッ！！パシャパシャパシャッ！！！）」

「・・・・・・・・・・・ムッツリーニ！？お前、体は大丈夫なのか？さっきまでぶっ倒れてたろ！？」

「この写真のためならば・・・・・・・・」

即答するムッツリーニ。かっこよすぎるぜ。

そんな俺たちの横で秀吉は俺が授けた策を実行していた。

「のう、明久よ。」

「どうしたのかな？秀吉。」

「はい、あーん。」

「ッ！！！・・・・・・守かッ！！！！！」

「ご名答。」

これぞ、最高の『はい、あ～ん』攻撃ッ！！美少女から繰り出されるこれは、Ｆクラス男子にとって必殺となる！！

「くっ、なんて卑怯な真似を・・・・！！だが僕もまだ命が惜しいんだよ。」

「ほう、耐えきったか。だがこれも予測のうち！秀吉。セカンドフェイズ！！」

「くっ、やる側も少々キツイの、これは・・・・・・・・・仕方ない。明久。あ～ん。」

「ぐぼろっしゃあぁぁぁ！！！！！！」

秀吉が放ったのは伝家の宝刀、『上目ずかい』！！！（ウル目）これで落ちない男はいないＺＥ！！

「ねぇ守。僕、今から地獄に行くのにこう思うんだ。・・・

「ってヤベエじゃん！！早く救急車だ！ムッツリーニ！！」

しかし、一向に返事も行動してる様子もない。

「どうした？ムッツリーニ。」

そう言って振り返る俺の目に飛び込んだのは・・・

「ムッツリィ二ィィィィーーーーー！！？」

俺はすぐさま駆け寄る。

「ムッツリーニ！しっかりしろ！・・・・・バカ野郎。いくら秀吉が可愛いからって、無茶するからだ！！」

「ま・・・・・・・・守・・・・・・・・」

「喋るな！今医者を呼ぶ！！」

「・・・・・・・・・・・・い・・・・・・・・」

「い？」

「一枚・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・なぜ、こんなことに。」

そんな秀吉のつぶやきは風と共に空に消えた。

放課後。俺たちの賢明な助命活動により九死に一生を得た明久、ムッツリーニ。だが・・・・・・

「もう！！信じられない！ウチが来る前に全部食べるなんて。」

俺たちの前で烈火のごとく島田が怒っている。ま、昼飯食いそびれ

たんだし当たり前か。

「まあまあ、美波ちゃん。そんなに欲しかったんなら、また今度作ってきますよ。」

「「「「うぇ？」」」」

「そう？じゃ、よろしく。瑞希。」

「「「「うがあぁぁぁぁーーーーーーーーーーっ！！！！」」」」

俺たちの戦いはまだまだこれからだ！！（泣）

第１５話～俺と屋上とべんとう（？）と２～（後書き）

どうでしたでしょうか。感想、アドバイス等お待ちしております。

今回、犠牲者が明久になりましたね～

ハイ、すみません。作者の自己満ですたい。

だって、秀吉にあんな過酷な運命を背負わせるわけには・・・・・・・・・・

ま、いずれは食わせますけどね。物語的に。

では、また次回！

第１６話～俺と戦争とＢクラス１～（前書き）

タイトルが前とかぶってるのは気にしないでください・・・・・・・・・

第１６話～俺と戦争とＢクラス１～

あの地獄の屋上の後の放課後、俺たちは（主に姫路の弁当（？）で）遅れた作戦会議を行っていた。

「そういえばさ、雄二。僕たちの目標はＡクラスでしょ？どうしてＢクラスを攻めるの？」

明久のもっともな疑問。Ｆクラスの面々がバカだから気づいて無いが、普通のクラスなら暴動が起こっていてもおかしくない。なんせ代表が自分たちに何も説明しないんだからな・・・・・もっとも、説明したところでＦクラスの奴らが理解できるかは怪しいが。

「・・・・・正直に言おう。・・・・どんな作戦を立てようが、俺たちはＡクラスに勝てはしない。」

神妙な顔つきで言う雄二。そりゃそうだろう。いくら姫路がいて、不確定要素である俺と明久がいると言っても元の力の差がありすぎる。Ａクラス５０人の内４０人は策をめぐらせればまだ確率は少ないとはいえ、勝機があるだろう。だが残りのトップ１０が別次元だ。特に代表の・・・・なんつったっけ・・・・・・ええと・・・・そう！霧島！霧島翔子だ。あいつの実力は姫路を凌駕する。まったく、どんな化けもんだよ。Ｆクラス全員で取り囲んでも（姫路は除く）返り討ちにあうのが落ちだろう。それほどの戦力差だ。代表が討ち取られない限り戦争に終わりはない。代表をとれる戦力がない以上負けは確定だろう。

「それじゃ、ウチらの目標はＢクラスってこと？」

島田の疑問に雄二は即答する。

「いいや。Aクラスをやる。」

「雄二、言ってることが滅茶苦茶だよ？」

確かに雄二の発言は矛盾しているように見えるが、俺は雄二の考えを読み取った。

「なるほどな・・・・・・勝てるかもしれんな。」

「守まで！？どういうことさ？」

さすがにこれぱかりは島田や姫路も気づいて無いようだ。

「クラス単位では絶対に勝てない・・・・ならばすることは一つ。・・・・・・一騎討ちだ。」

「どうやってそこまで持ち込むのよ？坂本。」

「簡単だ。Bクラスを使う。」

「え？Bクラスを使うってどういうこと？」

それすら理解してないのか・・・・・・・・・・・・・・・まさかコイツ・・・？

「明久。戦争で下位クラスが負けたらどうなるかわかってるのか？」

「え！？・・・・も、もちろん・・・・」

「じゃあ、言ってみろ。」

案の定答えに詰まる明久だが、姫路から助け船をもらって何とか解答した。

「・・・・・・・・・まあいい。じゃあ上位クラスが負けたときは？」

「悔しい！！」

朗らかな顔で言い切りやがった、こいつ。

「ムッツリーニ。」

「・・・・・・・・・（シュバッ）」

「金は言い値で払う。明久の持っているムッツリ商会によるコレクションをすべて押収、俺に回せ。」

「・・・・・・・・・・・・・かかるぞ？」

「金ならある。」

「・・・・・・・・・了解。」

「止めろオォォォォォォ！！守！君は僕を殺す気かい！？」

「・・・なら、今後明久、ムッツリ商会間の商品の取引を禁じるか。」

「マジすんません！！お願いします、お慈悲を～」

「チッ、じゃあ雄二に任せるか。」

「へ？雄二に？」

「呼んだか、守？」

「ああ、このバカの処分を頼む。」

「あれ？僕の意思は？聞いてる？ねえ！！」

「わかった。・・・・・・・・・ムッツリーニ、ペンチ。」

「僕を爪切りいらずにする気か！？」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ、吉井君。」

ここでも姫路のフォローが入る。ったく、姫路は明久に甘いな。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね。」

「そういうことだ。そしてそれを利用して交渉に持ち込む。」

「交渉、ですか？」

「まず、Bクラスを下したら、クラスの入れ替えをしない代わりにAクラスへ宣戦布告してもらう。入れ替えならFクラスだが、Aに挑んで負けてもCクラス相当だからな。まず乗ってくるだろう。」

「なるほど～それで？」

「それを使ってAクラスと交渉する。『Bクラスとの戦争直後に攻め込むぞ』ってな。」

人、それを脅迫という。ただ、有効な手立てではあるだろう。学年で二番目のクラスの後に連戦となれば多少きついだろう。まあFクラスも連戦となるが、こっちには『不満』という原動力があるし、何よりバカばっかりで体力は有り余ってるはずだ。

しかし、Aクラスはそうはいかない。もともと最高位だから買っても得られるものなど無いし、何よりFクラスのバカの相手をして時間をとられるのも嫌なはずだ。モチベーションの差は歴然としてる。

しかし、秀吉は多少納得がいかないようだな。

「じゃがそれでも問題があるのではないか？連戦で体力的につらいし面倒じゃが一騎討ちのほうが楽じゃからの。しかし――――」

「しかし、何だ？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのか？こちらに姫路がいることはすでに知れ渡っているじゃろう？」

まあDクラスに勝った時点で姫路のことは知れ渡っているだろうから、何らかの対処はされているだろうな。

「その点に関しては大丈夫だ、考えがある。」

まあ悪知恵の働く雄二のことだ。何らかの策はあるんだろう。
「とにかく、まずはBクラスをやるぞ。細かい話はその後してやる。」
「オッケー雄二。」
「というわけで、明久。」
「何？」
「Bクラスに行って宣戦布告してこい。」
「断る。雄二が行けばいいじゃないか。」
「・・・・・守。」
「オッケー。・・・・・・ああ、ムッツリーニか？明久のコレクションの処分についてなんだが・・・・・・・」
「卑怯な！！！」
「ほら、早く行って来い。それともDクラスの時みたいに殴られるのを心配してるのか？」
「それもある！」
「今度こそ大丈夫だ。・・・・・・・・・Bクラスは美少年好きが多いらしい。」

「そっか、なら大丈夫だね！」

コイツは何でそこまで自信満々なんだ？美少年？明久が？ハッ

「でもお前ブサイクだしな・・・・・・」

「確かに、向こうがキレて、逆に宣戦布告されるんじゃないか？」

「失礼な！！３６５度どこからどう見ても美少年じゃないか！！」

「５度多いぞ。」

「実質５度じゃな。」

「おいおい、評価が甘いぜ。５度もねえだろ。」

ちなみに上から雄二、秀吉、俺の順だ。

「皆なんてキライだっ！！」

そう言いながら駆け出す明久の後ろ姿に声をかける雄二。

「とにかく、頼んだぞー。」

うん。雄二が明久のフォローなんてするわけがなかったよね。

こうして、俺たちの昼休みは過ぎて行った・・・・・・

～放課後～

「・・・・言い訳を聞こうか？」

俺と雄二は明久に詰め寄られていた。明久のシャツは片袖がちぎれていて、暴行の激しさを物語っている。

「いや、予想どうりだ。」

「アッハハハハハハ・・・・明久お前ホンッとバカだな～」

「くきぃぃぃぃっ！！殺す！雄二も守も殺してやるっ！！！」

「まあ、落ち着け。」

「ぐぼぅあっ！！」

明久の鳩尾に叩き込まれる拳。常人なら一発で昇天するレベルだ・・・・・雄二、さすがだぜ。

「先に帰ってるぞ。明日も朝はテストなんだからいつまでも寝てるんじゃないぞ。」

「そんじゃな～明久。」

転がってる明久は放置して、俺と雄二はそれぞれの帰路に着いた。

翌日の昼食が終わった後、Ｆクラスに全員が集結していた。

「さて皆。総合科目テストご苦労だった。」

初日の時と同じように、机に両手をつき、皆のほうを見る雄二。

「午後はＢクラス戦だが・・・・・・・殺る気は十分か？」

『オオオオォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！！』

一向に下がらないモチベーション。Ｆクラスの強みだな。単純と言いかえれるけど・・・・

「今回の戦は敵をいかに教室に閉じ込めれるかがカギだ。そのため、開戦直後の渡り廊下戦で負けることは許されない。いいな？」

『ウオオォォォォ！！！！！！！！』

「そこでだ、前線の指揮は姫路にとってもらう野郎ども！キッチリ死んで来い！！」

「が、頑張ります。」

雰囲気についていけてない姫路。大丈夫だ。逆にお前までこの空気になれたら終わりだよ。

『フォオオォォォーーー！！！！！！』

・・・・・バカになったってことだろうしな。

ちなみに、廊下戦は絶対に獲るため、姫路を含む、Ｆクラス４０人が出ている。まず間違いなくとれるだろう。

俺？俺はもしもに備えての雄二の護衛だ。・・・・・・あれ？俺まだまともに召喚獣出してないような・・・・・

第１６話～俺と戦争とＢクラス１～（後書き）

どうでしたでしょうか。感想、アドバイス等お待ちしております。

おそらくそろそろ主人公の召喚獣は出すつもりですので。ではまた次回。

第１７話～俺と戦争とＢクラス２～（前書き）

遅くなりましたが、あけましておめでとうございます。

年末には投稿したかったんですが・・・すみませんｍ（＿＿）ｍ

今年も頑張って書きますのでよろしくお願いします。

では、本編をどうぞ～

第17話～俺と戦争とBクラス2～

キーンコーンカーンコーン・・・・・

普段は単なる授業の開始と終了を知らせるチャイム。だが、俺たちにとっては戦争開始の合図。皆の顔が引きしまったものに変わる。まあ、明久はアホ面であることに変わりはないが。

静かな教室に雄二の声が響き渡る。

「さあ、行って来いお前ら！目指すはシステムだスクだ！！！」

『サーイエッサー！！！』

今回の戦いは敵を教室に押し込むことが重要となるため、勢いが重要だ。Bクラスは文系が多いため、数学を中心として立会い教師の数を増やし、速攻で片を付ける！

～三人称視点～

「いたぞ！Bクラスだ！！」

「高橋先生を連れてるぞ！」

Fクラスの面々が廊下を走っていると、前方にBクラスのメンバー

を発見した。Ｂクラスは様子見のためか、１０人程度しかいない。

「サーチ&デース！！」

「ヒャッハァァァーーーー！！！皆殺しだーーー！！！」

「生かして返すな！！ここで仕留めるぞ！！」

人としてどうかと思う物騒なセリフを吐きながら、Ｂクラス戦は始まった。

Ｂクラス　野中長男（のなかながお）

総合　１９４３点

ｖｓ

Ｆクラス　近藤吉宗（こんどうよしむね）

総合　７６４点

桁違いの点数に初っ端から危機に陥る近藤。しかし、他のメンバーも例外ではなく・・・・・

Ｂクラス　金田一裕子（きんだいちゆうこ）

数学　１５９点

ｖｓ

Ｆクラス　武藤啓太（むとうけいた）

数学　６９点

Bクラス　　里井真由子（さといまゆこ）
物理　　１５２点
vs
Fクラス　　君島博（きみじまひろし）
物理　　７７点

まさに圧倒的。明久は必死にそれぞれにフォローを入れ、戦死を防いでいると・・・・

「お、遅く・・・なりました・・・」

姫路瑞希が到着した。

「来たぞ！姫路瑞希だ！！」

Bクラスもやはり、姫路のことについて調べはついていたのか、Bクラスに緊張が走る。

「姫路さん、今来たばっかりで悪いんだけど・・・」

明久が申し訳なさそうに姫路に話しかける。

「あっはい。じゃあ行って来ます。」

少し、フラフラしながら戦場へ向かう姫路。その姿は戦場に向かっているのにもかかわらず、可憐なものであり、Fクラス男子だけで

なく、Ｂクラス男子も少しの間見入ってしまったのは仕方がないだろう。

「長谷川先生！Ｂクラスの岩下律子（いわしたりつこ）が姫路瑞希に勝負を申し込みます！」

「あ、はい。よろしくお願いしますね、岩下さん。」

やはり、Ｂクラスは姫路を真っ先に潰したいのか、即座に勝負を申し込まれる姫路。こんなときでも姫路は丁寧な対応だ。それを余裕ととられたのか・・・

「律子、私も手伝う。」

岩下の後ろから、もう一人少女が出てきて、召喚を開始した。

『試獣（サモン）召喚ッ！』

岩下と彼女を律子と呼んだ少女の召喚獣は、剣と楯を装備したオーソドックスな召喚獣。対する姫路の召喚獣は、Ｄクラス戦の時と同じで大剣を肩に担いでいる。

「あれ？姫路さんの召喚獣にはアクセサリーがついてるね？」

姫路の召喚獣の左腕に着けている黄金色の腕輪を疑問に思った明久が疑問を漏らす。

「あ、はい。今回数学はけっこう解けたので。」

こんな時でものんびりとした姫路の答え。しかし、相対している二

人はそうもいかず、召喚獣の腕輪を見て顔色を変えていた。

「うそ！それって・・・・」

「私たちで敵う訳ないじゃない！」

「じゃあ、行きますね。」

姫路のその言葉と共に、召喚獣も構え、左腕の腕輪が光りだす。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

いまだ心の整理がついて無いのか、片方の召喚獣の動きが遅い。

「律子！とにかく逃げないと！」

そんな隙を姫路が見逃すわけもなく、岩下の召喚獣は腕輪から発せられた光線に飲み込まれる。

キュボッ！！

流石は姫路というべきか、その一撃で岩下の召喚獣は跡形もなく消滅し、一瞬でけりがついた。

「すみませんっ。これも勝負ですので！」

次の瞬間には姫路はもう片方の召喚獣に肉薄し、仲間がやられ、まだ混乱している状態のため微動だにしない召喚獣をその手に持った大剣で一撃で切り裂いた。

ほんの数瞬の出来事だったが、二人が鉄人に連れて行かれると、我に返ったように騒ぎ出す。

「岩下と菊入が戦死したぞ！！」

「バカな！あいつらはＢクラスでも中堅レベルの実力者だぞ！？」

「姫路瑞希…想像以上だ・・・」

全てのものに現れている共通の感情は『驚愕』。

姫路の圧倒的な強さを目の当たりにしたため、当然ともいえるが・・・

「み、皆さんも頑張ってください！」

姫路の指揮官としてはお話にもならないレベルの激励。しかし、姫路が美少女であるということが、Ｆクラスのメンバーには驚くほどの効果を与える。

「やってやる・・・やぁぁぁってやるぜ！！！」

「姫路さん！最っ高☆！！！」

御覧のように、一部熱狂は凄まじいことになっている。あまりの熱狂ぶりにＢクラスのメンバーは近づくことができないようだ。

「姫路さんは、いったん下がって。」

「あ、はい。」

相手の士気をくじき、逆に自分たちの士気を上げるという目論見は成功したため、明久は姫路に指示を出し、後方へと下がってもらう。体力的に姫路に連戦はキツイ物があるからだろう。姫路もそのことを理解しているのか素直に後方へと向かう。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！！」

自分たちの前線崩壊は間近と感じ取り、Ｂクラスは後退を始める。

（今回はＢクラスの教室に閉じ込めるくらいで終了かな？）

相手の指示を聞き、明久は今回の戦闘の狙いがうまくいったと思い一安心した。そのまま戦況を見守っていると秀吉が明久のほうへ向かってきており、報告が来た。

「明久よ、ワシらは教室に戻るぞ。」

「え？何でさ？」

急な帰還命令に疑問顔の明久。無理もないだろう。作戦は成功し、敵は敗走。後は被害をできるだけ少なくしながら敵を教室に閉じ込めるだけなのだから。

「Ｂクラスの代表じゃが・・・・・・・・・・・・・・・『あの』根本らしい。」

「え！？『あの』根本？」

今話題に出ている根本という男だが、とにかく評判が悪い。噂では

カンニングの常習犯であり、目的のためには手段を問わないらしい。曰く、『大会で相手に一服盛った』だとか『ケンカに刃物は標準装備(デフォルト)』だとかであり、正直学年全体から評価は低い。

「たしかに、戻っておいたほうがよさそうだね。」

「雄二に何かあるとは思えんが、守もいるしの。念のため、と言ったところじゃ。」

「確かに・・・・・あの二人に中途半端に手を出すと凄まじいことになりそうだよ。」

「確かにのう・・・・・・・恐らく根本は何かしら企んでいるのじゃろうが・・・・・・・・」

「「ご愁傷様じゃな／だね。」」

この場に守がいたら必ずこう言っているだろう。

『お前らから見た俺らはいったい何なんだ』と。

二人は姫路に一声かけ、教室へと戻って行った・・・・・・・・

「うわ、こりゃヒドイ・・・」

「まさかこう来るとはのう。」

「卑怯、だね。」

教室に帰った明久たちを待ち受けていたのは破壊された大量の筆記用具や机だった。

「酷いね、これは。」

「うむ。地味じゃが補給が難しくなり、点数に影響する嫌がらせじゃなあ。」

「あまり気にするな。修復に時間がかかるが、作戦に支障はない。」

「そうそう。明久たちもちゃんと上手くやってくれたみたいだしな」

その光景に顔をしかめる明久だが、雄二と守はこれと言ってリアクションは無い。宣言どうり、作戦に影響は無いからだろう。

「でも、何で雄二たちは教室がこんなになってるのに気づかなかったの？」

明久からしてみれば、この二人がそう簡単に外部から侵入を許すとも思えないためどうやってこの惨状が形成されたか謎なのである。

「協定を結びたいと言われてな。その調印のために席を外していた。守にはもしものための護衛として来てもらったんだ。」

「協定じゃと？」

「ああ、午後四時までに決着がつかない場合戦況はそのままでいったん明日の午後九時に持越し、その間の史試召戦争に関わる一切の行為の禁止だそうだ。」

「でも、うちは体力勝負にしたほうがいいんじゃあ？」

Ｆクラスは体力は有り余っているものが多いため、持久戦であろうとそのテンション、勢いが落ちることはない。それをしっかり理解

した上での発言だろう。だが、明久は忘れている存在がいる。

「姫路以外は、な・・・」

「あ・・・・」

そう、姫路は病弱であり、明久が戦争を始めた理由もその姫路にもっときれいな設備に移ってほしいという願いからだ。

「明日がおそらく作戦の本番になる。その時、姫路の個人的な戦力が必要になるからな。姫路の補佐として付ける予定の二番手である守は大丈夫だろうが・・・」

「あれ！？守ってそんなに頭良かったの！？」

「失礼だな明久。俺は基本教科はB～Aクラス並みで、普通に試験を受けてれば今頃Aクラスだぞ？」

明久は友人の新事実に驚愕し、声が出ないようだ。

「とまあそんなことはどうでもいい。俺たちにとってこの条件はかなりいいものだ。だから結んだ。」

明久は悩んでいた。あそこまで噂されている根本がこんな甘い条件を出してくるものだろうか、と。しかしそれを考え込む前に秀吉の声に呼び戻される。

「明久よ。ワシらはとりあえず前線に戻ろう。向こうでも何かあっては困るじゃろう？」

「ん、そうだね。じゃあ雄二、後よろしく。」

「おお、ペンや消しゴムの申請はしとく。」

雄二の言葉を背中に聞きつつ、明久と秀吉は走り出した。

「くれぐれも用心するのじゃぞ？」

「うん！秀吉もね。」

互いに言葉を掛け合い、戦場へと戻る明久。

そんな明久のもとに須川が焦った顔で走ってくる。明久のもとにたどり着いた須川の口から出てきたのは・・・・・・・

「明久！島田が人質に取られた！かなりマズイことになっている！！」

最悪の知らせだった・・・・

第17話～俺と戦争とBクラス2～（後書き）

どうでしたでしょうか？今回は初の試みで三人称視点でやってみたんですが・・・指摘などあればお願いします。

今回は主人公マジ空気ｗｗｗ

あ、でも今回の戦争で召喚させようと思ってますので。

ええ。モチロンチートですがね！！

恐らくあと1・2話で出るとは思うのでお楽しみに。

感想などお待ちしてまーす（＾－＾）ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8090w/

僕とバカとFクラス

2012年1月6日23時45分発行